求道

第六卷

第七號

求道第六卷第七號目次

求道

◎是非しらず、邪正もわかぬこの身なり　自督

◎清澤先生及其信念　講話　近角常觀

◎四海兄弟　聖傳

◎ヂヤータカ釋尊傳
第廿七　豚を嫉みし牡牛の話
第廿八　獸に慈悲あれ
告白　山崎震雷

◎善巧方便奇なる哉

講義

◎歎異鈔　近角常觀
第拾二章　大切の證文につきて

時報

◎西川唯信居士追悼會◎夏期傳道概況◎爾後の傳道日割

求道學舍

講話

第二　求道會

第三　求道會

暑中休講

九月十九日日曜より總て開講

求道　第六卷　第七號

是非しらず、邪正もわかぬこの身なり

是非しらず邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。嗚呼是親鸞聖人の現存法語中最後の遺訓也、御自身の懺悔也、心中の直寫也、深刻を極めたる御告白也、實に是れ我御身にひきかけて、現代の我れ等特に私自身の爲に遺したまへる金言也、訓誡也。顧みれば我身こそ眞に小慈小悲もなき身也、小善小行もなき身也、「蚊一つに施しかぬる我身かな」、若し微かなる慈悲心あるが如く見ゆることもあらば、是れ僞善也、修飾也、賢善精進を現ずる也、而して心中溢るゝものは名利也、內心漲るものは名聞也、利養也。宗敎家を自任し、信仰を標榜して立つ、人世最も醜きものは人師を氣取りて東西に飛び廻れる名聞利養の我身なる哉。誠に知りぬ、悲い哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑し、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、愧ずべし、傷むべしと。誰がために遺したまひし御言ぞや、親鸞もこの不審ありつるに唯圓坊おなじこゝろにてありけり、聖人の御同心なかりせば我身愛欲の虜、名利の奴、茫々たる大海に迷ひ、有爲の奧山に踏み入り、何れの所にか津梁を求め、何の時か解脫を得ん。眞に聖人は眞宗末代の明師也、聖人の御導きあるにあらずんばいかでか佛智不思議に遇ひたてまつるべき、いかでか選擇本願の不可思議を仰きたてまつることを得べき、多生曠劫いかなる深厚なる因緣のありけるにや、末代の今日聖人の御敎を蒙りて金剛の眞信を得たてまつることを得る。執持鈔に曰く、是非しらず邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり、往生ほどの一大事、凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべしと。嗚呼自然法爾の御力を仰きたてまつりて、偏へに如來の御はからひにまかせ、佛智不思議を仰きたてまつれば、我身は善惡、是非、邪正もわかぬ名利虛假の醜虜なる哉。是れ聖人の絕筆也、天地を動かす懺悔也、人類のあらんかぎり救濟したまふ德音也。

抑々我等善惡是非の言を爲すもの、皆自己を以て尺度とし、自見を以て標準と爲す、『彼是なるときは我非なり、我是なるときは彼非なり、我必しも聖に非ず、彼必しも愚に非ず、共に是れ凡夫耳、是非の理、詎そ能く定むべけん』是れ聖德太子の垂誡にして、恰も聖人の御自督と其揆を一にす。歎異鈔に曰く、聖人のおほせには善惡のふたつ總じてもて存知せざるなり、そのゆへは如來の御こゝろによしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ、如來のあしとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそあしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこと、みなもて、そらことたはことまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはしますとこそおぼせはさふらひしかと。皇太子の遺訓に曰く、世間虛假、惟佛是眞と。嗚呼益々前聖後聖其揆を一にす、眞宗の淵源遠く皇太子に在りと謂つべき歟。

善惡のはからひは何れも我見を尺度とすれば也、我身の惡しきを悲むは如何にも殊勝の至りなれど、是れ惡しきものをたすけんとの如來の大悲を疑ふもの也、佛如何ばかりの力ましますとしりてか罪惡の身なれば、すくはれがたしと思ふべき。又我行の善からんとを勉むるは如何にも感心の至りなれど、未だ何れの行も及び難き我身なるとを自覺せざるものなり、佛かねてしろしめして造無一善の我身がために選擇本願念佛を與へたまひしを知らざるもの也。世の信仰を口にし救濟を說くもの唯信仰の一なるを知らずして知らず識らず修養の力を加ふ、爲めに惡を悲み善を勉めんとす、其志や嘉みすべく、其心や尊むべし、されど是れ佛智不思義を仰がざるなり、義なきを義とせざる也。聖人曰く、念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり、たとひ法然上人にすかされまゐらせて地獄におちたりともさらに後悔すべからず候と。是唯念佛の一を見出したる姿也、彌陀にたすけられまゐらする有樣也、眞の知識の仰を蒙る態度也、地獄におちたりともさらに後悔すべからず候とは、かく我心を以てきめこみたるにあらず、自餘の行を勵み得ざるもの、何れの行も及びがたき我身なれば、此如き唯一の救濟佛智不思議に遇ひたてまつる、之を信ぜざらんとするも信せざるを得ざる也。「何事の在しますかはしらねども、唯ありがたさに涙こぼるゝ、」『たゞ不思議と信じつるうへは兎角の御はからひあるべからず候、

往生ほどの一大事凡夫のはからふべきにあらず、補處の彌勒菩薩を初として佛智の不思議をはからふべきにあらず、まして凡夫の淺智をや、かへす〳〵如來の御ちかひにまかせたてまつるべきなり。』

嗚呼我苦しみて初めて煩惱具足の凡夫たることを自覺し、我つきあたりて初めて罪惡深重の我身たることを悟る、而して初めて此に煩悶の聲を擧げ、後悔の涙を注ぐ、何ぞ知らむ如來は豫ねて知ろしめして選擇本願をたてたまひしにあらずや、煩惱具足の凡夫と仰せられたるにあらずや、此に至りて我等は善し惡しの言を挾むべき餘地を存せざるなり。善からんとはからふも我身の價値を知らざるに座する也、惡しきとて悲むも如來の御存知なることを知らざる也、況んや惡しきものを助けたまふ願なればとて惡からんとはからふ、ます〳〵大悲の御心を知らざるもの也、況んや他の惡を說き、善を評す、群盲の象を探くるが如く、烏の雌雄を爭ふに似たり。聖人曰く、やう〳〵さま〳〵大小の聖人善惡の凡夫のみづからが身をよしとおもふこゝろをすて、身をたのまず、あしきこゝろをさかしくかへりみず、またひとをよしあしとおもふこゝろをすて、ひとすぢに具縛の凡夫、屠沽の下類、無碍光佛の不可思議の誓願、廣大智慧の名號を信樂すれば煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなりと。嗚呼。

よしあしの文字をもしらぬひとはみな、
まことのこゝろなりけるを、
善惡の字しりかほは、
おほぞらごとのかたちなり。

或る時一蓮院師を招きて、酒杯を傾けながら、仰せに
凡そ誰れても我が心中をこしらへる事にかゝりて居る故、其の心中は我がこしらへもの也、敎へる人も唯理屈ばかり敎へて、心中を造ることに骨を折る也、信心と云ふことは、聞其名號信心歡喜の八字を我が賜とするばかりぢやが、そう思ふ人の少いのは甚だ殘念なり。
一蓮院師曰く、佛の力お一つて、助けて下さると信ずる外には、聞其名號のいはれはない、と聞いて居ります。
師曰く、それでよし、それでよし。

《香樹院語錄》

自督

清澤先生及び其信念

先生の一生涯は僅に四十一年であつて、決して長いことはない。併しながら其間一日でも樂な生活はなされなかつた。句佛上人が『勿體なや祖師は紙子の九十年』と申されたが、先生は實に聖人の半生涯にして、尙ほこれからと云ふ所でなくなられてから、はや七年を經過した事である。

私は考へる、自分はこの七年間になにをしたであらう、ふりかへり見れば大に慚愧に堪へぬ。先生御在世の時は何時もどうしたらよからう〳〵といふ考ばかりであつた。先生御在世の時御敎訓を蒙つて、宗門の爲に苦辛をした時の生活と、先生のなくなられてから今日迄の生活と比べると、實にこの七年間は樂隱居でもして居たやうに感ずることである。先日も中外日報の記者が、先生に就いて感想が無いかと聞かれた時、私は「御先祖に討死させて高枕」の感じがあると申しました。

現今一派の上に見ても、當御法主の御代となつて、稍一同が愁眉を開かんとする今日、既に先生は御出にならぬ。先生は今日の結果をもたらす前、誰も氣のつかなかつた時に、一身を捧げて一派の爲めに斃れられたのである。

先生の一生は實に血を以て書かれた一生であつた。何事も志されたことは大半成就しそうになると一事々々みんな破壞し、通られた道は後から〳〵皆んなこはれて仕舞ふた。志すならば立派な學者にもなれる身ながら、當時誰も志さなかつた宗敎の爲めに一身を犧牲にして京都へ赴き、熱心に學校を經營せらるゝ際肺病に罹られた。御自分の考てはそのまゝ治療せずに職の爲に仆るゝ決心であつたのを、友人の爲めに我を折つて禁欲主義をやめて、養生せらるゝやうになつた。

宗門を立派にし度いと云ふので、同志と相謀りて本山を改革せんと企てられた時、私は京都へまゐつて親しく先生のなされ方を見せて戴きましたが、一から十まで何事も淸淨潔白の理想を採りて、一歩も枉げず敢行せられた。先生の事業は理想として生き殘つて、事實として實現するには餘り潔白であつた。抑々私が信仰に氣付かせて頂いたのは此の時の事であるが、直接先生より信仰を聞いたのでは無い、つまり先生

の理想を追ふて他迄奮發して、凡てをすてゝ宗門の爲めに盡すが爲めに、慕直に進んだ。而して終に色々の事に衝當りて煩悶に陷りた。而して顧みれば曩に身命をすてゝ盡したつもりであつたが、皆な名利の心に外ならぬことを氣附かせて貰ふた。本山を改革せんとして自分の心を改革させて貰ふた。今よりして考へて見れば、先生は如來の御慈悲を知らせて下さる爲に御手引きをして下された善巧方便であつた。かくて後半生に如來本願の難有きことを氣付かせて頂く事になりました。

先生曰く、人間の力はだめである、一家にあつても自分の思ふやうに出來ぬ。自分の言ふた事にさへ反對した行動をとらねばならぬ場合があると。斯く先生は一家の事を初めとして一生涯常に身を捨てられた。實に何遍捨てられたか知れぬ、四十一年の生涯は捨てどほしの一生であつた。どんな場合でも捨てゝ〳〵捨てとほした極が、晩年に住せられた先生の信念であります。

一派を想ふ先生の眞心は非常のものであつた。嘗つて御法主が恰も十年前、新法主であらせられた時、修養の爲め東上せらるゝやうになつた時、先生は非常に喜ばれて、直ちに自坊の西方寺に演說會を開き、宗門の前途に光明あり、曙光赫けりと申されて、直ちに東京へ來て上人に謁せられた事である。

私は先生の敎訓が身に泌みて有難く感ずるのは、何時でも事柄が左右に分れる時は、必ず先生に行きて敎を請ふたのである。そして其時先生の一言により大問題が左右に決せられてあるのである。此の點は此頃深く回想して居ることである。宗敎法案の時でも、洋行する時でも先生に相談した事が少くなかつた。そして今から考へると常に大問題の岐るゝ處であつた。

先生の企てられた多くの事柄が皆な出來ずに終られたことは決して無意義で無い。先生の企てられた事は一代の間に出來る位のものではなかつたのである。それが極めて大きなことであつたから、大抵のものなら是れてよしといふ處を、それでもいかぬ、是れでもいかぬと云ふやうになつたのである。先生最後に東京を去らるゝ時私に申さるゝには、今年は破壞年である、內局は破壞する、我が子は破壞する、我が妻は破壞する、今亦學校が破壞した、我も久しからずして破壞するのであらうと。翌年六月六日遂になくなられた。

世の中には先生の事を消極的といふ。消極的には違ひない

が、其の消極がなくては大積極が生ぜぬのである。先生は常に『阿含經』を愛讀せられたのであつたが、『阿含經』は眞に世の當てにならぬことが明かに示されてある。其の裏には、常住であるは涅槃ばかりであることが示されてある。然るに夫を知らずに無常である〳〵と苦しみつゝあるアキラメ主義と思ふは大なる誤である。無常であると苦むのは、世を常住と見るからである。涅槃こそ常住と知れたところで、眞の世の無常が知れたのである。一心に阿彌陀如來がたのまれた時は、直にもろ〳〵の雜行雜修自力の心がふり捨てられたるのである。先生の消極は涅槃常住の大積極を生み出す人生無常の阿含である。律法的にアキラメ主義と見るから小乘の名が附くのであるが、先生の阿含は律法小乘の阿含では無い。此の世の無常を悟了して涅槃常住の輝ける眞に世の捨てられたる有樣である。よしや出家發心の姿を主とせずとは云へ、眞に人世の無常が知らるゝならば、世のあてにならぬことは感ぜらるゝ筈である。

先生の生涯はあてにならぬことの實現である。學問もあてにならぬ、宗門もあてにならぬ、妻子もあてにならぬ、我身もあてにならぬ、何んてもあてにならぬ、かくあてにならぬことを知らして下さるのが如來の御計ひである。『我信念』の中に「死生命あり、富貴天にあり」と申されたのがこれである。私は御慈悲を喜ぶやうになつてから時日を經るに從ひ、段々先生の御言葉が一々味はれるやうになつた。嘗て先生の三回忌の時に、親鸞聖人の『御消息集』をよみ、佛天の御計ひなりと云ふを難有く感じましたが、聖人は善鸞大德初め御弟子が、關東の信者同行を惑亂するやうな出來事の生じた場合に、人の爲めに亂さるゝやうな信心はこはれたがよいと仰せられて、このやうに安心せられた。先生はなくならるゝ時に何物も佛天の御計ひなりと信じ、平和に此世を去られたのである。

先生が眞宗大學の學監を辭してから後、京都へ赴かれ先生の後身と申すべき稻葉先生と私と三人で、越中の乘杉君の請に任かせて寫眞をとつたことであるが、其時私が大谷の御廟に參詣し、歸路に先生の御宿に參りたる處先生の申さるゝには、唯今新御法主に御目にかゝりて來ました。是が私が御事へ申す最後であることを申上げて來ましたと、懇々と語られて大濱へ歸へられた。七年後の今日私は先生に向ひて何を申してよいやらわからぬ。さりながら一生の間の御苦勞は、唯

如來廣大の御慈悲を知らせんが爲めといふことゝ信じます。而して是れ又聖人御一代の御教訓である。

私は先生が聖人の生れ代はりであらせらるゝと云ひたいが、寧ろ聖人の信仰を味はして頂くやうに導きて頂きたは偏に先生の御恩であると申したい。我等出來うるならば聖人の御在世に遇ひ、生身の聖人に遇ひたいが出來ない。そこで萬人をして聖人に接せしむる爲めに宗門といふものが表はれ、此の宗門の中に聖人の代表者として我等有緣の眞の善知識が在すことを信ずるのであります。而して聖人の信仰を味ふと共に、此の宗門善知識の尊きことを知らして貰ふたは、一に先生の御恩であります。

一、唯何ともなく、御淨土へまゐらふと計り思ふて、一大事とおもはず、これは機の深信のないものなり。たとへば、只今三途へ沈むべき罪人が攝取の光明へ逃げ込んで、やれ〳〵嬉しやと思ふ居るところなり。唯なにへんともなき淨土參りと聞いて居るのが誠の安心であらうやうがない。

二、信心は一念の事に決定したれば、それほどに報謝がつとまらぬとて　如來樣は御捨てはなさるまい、だいじないと思ふて居る機。これは信報謝の相を知らぬものなり、信とは報謝の初めなり。報謝は信の相なり。燈燭の火の如く、一念の場で信心の火をつけだれば、ありがたや〳〵と相續する也。

《香樹院語錄》

講話

四海兄弟

《求道學舍日曜講話》

近角常觀

今日の題は『四海兄弟』であります。四海兄弟といふは今日世間の上でも人類悉く兄弟である抔と色々に申す事でありますが、今日私の申す四海兄弟とは、一佛の廣大なる惠みの下に、一切の有りとある者は皆な四海兄弟である。同一佛陀の惠みを受くる者は、皆な一味平等の兄弟であるといふ事を話し度いのであります。

先づ言葉の上より申す時は、曇鸞大師の『論註』の中に、彼の安樂國土は是れ阿彌如來の正覺淨華の化生する所に非ること莫し。同一に念佛して別の道無きが故に。遠く通ずるに夫れ四海の內皆な兄弟なり。眷屬無量なり、焉んぞ思議すべけんや。

こういふ御文があります。此の御文の味ひを此頃私は殊に有り難く頂いて居るのであります。佛の廣大なる惠みの下には四海の內が皆兄弟である、善人と惡人の別も無い、罪の淺きと深きの差別も無い。又老いたると若きとの區別も無い。位の上下、階級の高低といふ事も無い。所謂『信卷』の

大願淸淨の報土には品位階次を云はず、一念須臾の頃に速

に疾く無上正眞道を超證す。

で、佛の廣大なるお慈悲を頂く上には、更に老少善惡愚悪邪正の別が無い。といふのが四海兄弟の味ひであります。

偖て今日の題を出しました譯は、度々申した事でありますが、此の六七年間常に講話を來聽して下された西川理學士が病中非常に慶んで居られる。此の事に就きては前の講話にも詳しく申したのでありますが、其後私は毎に病床を訪ねてお慈悲を喜ばして貰うて居る、一昨日も參りました處が、非常に有難き事を話されて、私も感極つて言ふ所を知ら無つたといふ有樣であります。夫は何かと言ふに、細かく申せば色々ありますが、私が參つて「此の人生上の事に就きては何も心配なさるには及ばぬ。貴方が今度頂かれた處の廣大なる佛の御恩、惠み、是れ一つを貴方が慶ばれたといふ事は貴方の爲に此上も無き寶であると共に、遺族の方に對しても又此上もなき形見の寶である。貴方の後に遺らるゝ方々も又貴方の御緣で同じお慈悲を喜ばるゝに違い無い、今貴方は自分の頂いた味ひを、誰にも彼れにも知らせ度い〳〵と思ふて居らるゝけれども、今では解らぬ。併しながら貴方の慶ばれたお慈悲は必ず皆樣に行き屆いて下さるから少しも心配することは無い。御夫人を初め御兄弟衆一家悉く此のお慈悲を頂かれるなり、同心一體となりて貴方の行かれる淨土に同じ樣に行かれる事が出來るのである。之は貴方の力にあらずして、佛の廣大なる御手引によるのである。」と話しました。すると申さるには「自分も實に有難い。若し佛の御慈悲が解らなんだら何れ丈け苦勞するかも知れぬのであるが、今では今晩命畢るとも一も心配の無いやうにさせて貰うた。此れ計りは實に有難き佛のお惠みである。」と言つて私に向き直つて言はるゝには、「此の心靈上に安心を得た處が、今迄は心の隔つた者や、氣に喰はぬ者が色々有つたが、今では自分も夫等の人を憎いと思ふ心が更に起らぬやうになつた。自分は今迄涙を流した事など決して無つたのであるが、却て今では心を隔てたり、自分の心の解らぬ人を見ると、可愛相て涙がこぼれて、此間も夫等の人に、如何なる者も佛のお惠みを忘れてはならぬと話して置いた事であつた。君に賴んで置くが、誰にも彼にも同樣に佛のお惠みを知らせて呉れ。此等の者が皆な一樣にお慈悲に氣が附いて呉れる事が有つたら、是程自分に於て滿足の事は無い、此の事は是非に君に賴んで置く。」とて、家庭の人一人々々に就きて病床今や命畢らんとする身で、自分の病苦を忍びつゝ賴まれる。「自分の苦痛は唯病苦丈けで行く先きは實に明らかて安心であるが、何うか誰れ彼れにも此のお慈悲を知らせてやつて呉れ。」中には御兄弟の方て西洋に行つて居られる方もある。「夫にも自分が安心して死んだと言つて遣つて呉れたら同じ喜びに入るかも知れぬから何うか言つてやつて呉れ。宜しく賴む賴む」と私の手を取つて賴まれる。私の歸らうとするを又呼び返して賴む、賴むと言はれる。「自分も之には長い間苦んだのであるから、此のお慈悲に氣が附くといふ事は中々六かしい。自分も一言や二言て解らうとは思はぬ。併し六かしい事ではあるが、若し之が解つたら人生是程の幸福は無いのであるから」と言はれる。其の言はれるのは皆信仰上

から言はれるのであるから、私も感極まつて何とも言ふ事が出來ぬ。四海兄弟といふ事を今迄聞いて居つたが、今西川君が自分の身を忘れて、お慈悲を人に知らせ度い、人生はお慈悲てなくては行けぬ、商買するも之て無くては出來ぬ、人生何事をするも之て無くては可かぬと言はれる、四海兄弟とは實に此の廣大の味ひてあると氣附かせて貰つた事であります。して自分の身を振り反つて見るに、第一お慈悲を慶んて居るといふ私共自身が、そういふ心持ちて人に話をする事が出來るか、實際自分と心隔てる者に對して、夫程迄に嚙み碎いて言ひ聞かす事が出來るか。私は面の當り西川君が一人々々に就きて何うかして〳〵と思ひて言はるゝ其の同心一體の親切を目擊して、涙を流して歸つて來た事であります。

前の講話の時には同君がお慈悲に氣附かれて、今迄は氣に喰はぬ者や、心の隔つた者が有つたが、之は皆な自分の親切が足らなんだのだと言はれた事を申したのでありましたが、今は進んて右にも左にもお慈悲を知らせ度い、又佛は同樣に哀れんて下さるのであるから、何人も早晩お慈悲を頂く事が出來る、頂くと同一念佛無別道故の故に皆んなが南無阿彌陀佛々々々と喜んて、同じお慈悲の一道に行く事が出來ると言つて居られるのである。勿論其人の過古の性質や、境遇や、經歷には其人々々によつて種々の別がある。人間の爲る事は凡て善きも惡しきも皆な業報て、其業報は千差萬別であるけれども、此のお惠みを頂くに至つては更に何等の變りも無い。皆な一樣に同じ大悲の惠みの中に入る事が出來るのである。尙ほ申すならば此の佛の廣大なる惠みに向ふ時は、設へ善人なりとて其の善が善にはならぬ。度々申す如く、澤山兄弟が有る中て、如何に出來が善くて人から褒められる小供ても、其子が親の御恩を知らずして自分の力て成長し、自分の力て成功し、自分の力て褒められると思うて居る間は、如何に褒められ成功してもまだ眞實の處は解つて居無いのてある。又如何に貧しくて常に親に心配ばかり懸けて居る小供ても親は決して捨てゝは措かぬ。寧ろ心配懸ければ懸ける程彌々之を哀むのが親の情てある。併しながら其心配懸ける小供も親の心を知らずして、自分の如き者は仕方が無いと自暴自棄に流れて居るなら、何時迄たつても親の許には歸へれぬのてある。今西川君の場合に就きて言へば、自分が今命畢らんとして、有りと有る自分の兄弟や親族を寄せ集め、此の廣大の惠みを言ひ聽かさうといふ一段になると、如何に出來の善き人、勝れた人ても、佛の御恩に氣が附かず、自分の力てやつて行けると思ふて居る間は設へ親の枕許に歸つて居ても、未だ眞に歸つて居るとは言へぬのてある。今迄如何に評判の良き人てても、眞實親の枕許て親の御恩に氣の附く時は、「あゝ今迄自分が偉いと思うて居たが、皆な親から育てられて居たのてあつた。今迄自分に力があると思うて居たは實に大なる誤りてあつた。」と、あやまり果てるより外は無いのてある。『歎異鈔』には、

自力作善のひとはひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ彌陀の本願にあらず、しかれども自力のこゝろをひるがへして他力をたのみたてまつれば眞實報土の往生をとぐるなり。

とあつて、如何に學問あり、品行方正の人であつても、眞實

お慈悲の一つが解かる時は、今迄斯の廣大の御恩を頂きながら御恩を御恩とも知らずに居た、實に我身は惡しき徒ら者であると氣が附くのであります。又今迄自分は親に心配苦勞ばかり懸けて實に申譯が無い、自分の如き不孝者は親の傍には歸へれぬと、自分で自分を惡く思うて居る者も、眞實の慈悲、惠みに氣が附けば、此者を見捨てぬとの親の慈悲心である。

『歎異鈔』には、

くちには願力をたのみたてまつるといひて、心にはさこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからん者をこそたすけたまはんずれど思ふほどに、願力をうたがひ、他力をたのみまいらする心かけて、邊地の生をうけんこともなげき思ひたまふべきことなり。

とあつて、實に自分程罪の深い者は無い、然るに其の罪の深い者を助け給ふ佛の本願と聽いて居ながらも、心の底ではさすが善からん者をこそ助け給はんずれと思ひ、矢張り善い事を仕た方が可い〳〵と思うて居る。夫だから自分如き惡人ではとなつて何時迄も親の許へは歸れ無い。之は一見甚だ謙遜のやうてはあるけれども實は廣大なる佛の願力に對し疑ひを抱く者である。『唯信鈔』にも自分如き惡人では迚も助からぬ抔と言つて居るのは、佛の不思議力を疑ふ罪であると言つて、

佛いかばかりのちからましますとしりてか、罪惡の身なればすくはれがたしとおもふべき。

廣大なる惠みを疑ふ罪が有るぞと嚴しくお誡め下されてある。我々は平素佛の本願の廣大なる事を思はぬからそんな事も言つて居るのであるが、眞實お慈悲に氣が就く時は、もと〳〵其の罪の深い者を見捨てぬとあるが佛本願の御眞意である。廣大なる御恩に預りながら御恩を御恩とも知らぬ者、其の罪惡深重の我々なればこそ、彌々其者を哀れみ下さるのである。我々日比は何の彼のと言つて居るのであるが、彌々臨終を取り詰める時は、實に斯の如き罪惡深重の私、御恩を御恩と知らぬ此者を特に哀れみましますお慈悲で有つたか。此の廣大の思召を頂かずに今迄彼是れ苦しんて居たは實に勿體無いと中心より回心懺悔し奉る外は無い。斯く廣大の親心に心底より氣が附く時は、如何に罪深く障り多くても少しも心配にならぬ、彌々其者を餘計に哀み給ふお慈悲と、益々喜ばせて貰ふ計りてある。

斯くの如く何れ程善き者でも一念如來のお慈悲に氣の附く時は、自分が善いと思ふ心は無くなり、又何れ程の惡人でも罪が深いとくよる心は消えて、此の罪深き者をと彌々喜ばして頂くのてある。其の喜びの有樣は親鸞聖人が

彌陀の五刼思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ。

と仰せられた聖人の喜び其儘て、山程ある我々の煩惱惡業を氣の附く一念に根底より引くり反して下さるのてある。我々は此の惡業煩惱を一々自分に斷じて行くのなら迚も行く事は出來ぬが、お慈悲を頂く一念に根底より引つくり反して下さるのてあるから、如何なる煩惱惡業も少しの障りともならぬ。如何にもそくばくの業を持ちける身にてありけるを助けんと

思召し立ちける本願の添けなさよと氣の附いた一念には、有らゆる罪みとがも更に心配が無くなつて、唯勿體なし〳〵と念佛させて貰ふ計りてある。『歎異鈔』には又先きの御文に續けて宣はく、

信心さだまりなば往生は彌陀にはからはれまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけてもいよ〳〵願力をあふぎまいらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のこゝろもいでくべし。すべてよろづのことにつけて往生にはかしこきおもひを具せずして、たゞほれ〳〵と彌陀の御恩の深重なることをつねにおもひいだしまいらすべし。しかれば念佛もまうされさふらふ、これ自然なり。わがはからはざるを自然とまうすなり。これすなはち他力にてまします。云云。

惡ろければ惡ろきに就け、彌々願力の尊き事を思はせて貰へば、ひとりでに念佛も口に浮んて下さるのてある。吳々も申して置くがお慈悲に氣の付くは一念は決して六かしき味はひては無い。此の罪深き我々を飽迄見捨て給はぬ廣大なる御心、如來大悲の惠み、唯是れ一つと氣の付いた心持てあります。

偖て此の惠み一つと頂いた心持は、如何に出來の良き者ても如何に出來の惡しき者ても同一てある。親鸞聖人は『正信偈』の中に

能く一念喜愛の心を發すれは、煩惱を斷せずして涅槃を得。凡聖逆謗齊しく回入すれば、衆水の海に入つて一味なるが如し。

と仰せられて、一念此の廣大の御恩に氣が付く時は、凡夫てあらうが聖者てあらうが、乃至五逆十惡誹謗正法の惡人てあらうが、あゝ今迄は實に相濟まなんだと廻心懺悔の思ひより外は無いのてある。又『歎異鈔』には宣はく、

信心の行者自然にはらをもたてあしさまなることをもおかし、同朋同侶にもあひて口論をもしてはかならず廻心すべしといふこと、この條斷惡修善のこゝろか。一向專修のひとにをいては廻心といふことたゞひとたびあるべし。その廻心とは日ごろ本願他力眞宗をしらざるひと彌陀の智慧をたまはりて、日ごろのこゝろにては往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて本願をたのみまいらするをこそ廻心とはまうしさふらへ、云云。

此のお慈悲に氣の附く迄は、是程廣大の御恩とは知らず、彼れが善いとか、是れが惡いとか、濟むとか濟まぬとか言つて居るのてあるが、氣が附いて見ると惡い者といふは外には無い。此の自分程罪惡の者は無いのてある。世の中には色々の人があつて、中には形に顯はれて惡い人も有る。けれども今我々は自分が善くて人を殺さぬのてなく、自分が善くて盜みをせぬのては無い。唯銘々過古の業報の如何によつて、夫が形に顯はれると顯はれぬと丈けの違ひて、內心の罪惡に至つては更に異なる處は無いのてある。然るに其罪惡の者を見捨て給はぬは佛の御慈悲一つにてましますを頂く一念に千萬人の者が等しく安心させて貰へるのてある。若し人生より此のお慈悲を取除けるならば、人生は百千人悉く千差萬別てある。或は學門智識の深淺があり、或は位置財產の多少があり、或は境遇性質の相違が有る。寧ろ此の相違の有るが人生の當然てある。

然るに此の人生の善し惡しが結局一ッになつて仕舞ふは何處に在るか。外ては無い、此のお慈悲の分る一念に善惡邪正貧富貴賤皆な同一信味の兄弟として頂くのてあります。此の一念の上に於ては善人が善人て力んては居られぬ。又惡人が惡人て落ち切らぬ。其の有樣は我々が平日燈す光の中に或は電氣の光があり、或はランプの光もあり、或は光の強きあり、或は光の弱きあり、千差萬別てある。併しながら之は各自の性質や境遇の上からて彌々夜が明けるとなれば何うてあるか。電氣もランプも乃至如何なる暗室と雖も皆な一味平等の明るさてある。設ひ電氣が一つともれて居ればとて、夫て餘計に明るみが增すといふ事も無いのてある。常に申す『歎異鈔』の御文てあるが、

彌陀の本願には老少善惡のひとをえらばれず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆゑは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにと。云云。

一度夜が明け渡つた上は電氣もランプも何も要らぬ。「本願を信ぜんには他の善も要にあらず。念佛にまさる可き善無き故に。惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐる程の惡無きが故に」。唯南無阿彌陀佛々々々とお慈悲を慶ばせ貰ふ計りてあります。西川君が信仰に入られる迄は色々私の雜誌や書物もお讀み下され、又色々と私にお聽き下されたのてあるが、喜ばれた今は唯『歎異鈔』一冊有る斗りてある。夫も強ちに讀む事要らぬ。唯南無阿彌陀佛々々々と慶んて居られる斗りてある。本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさる可き善無きが故にてある。又惡をも恐る可らず、彌陀の本願をさまたぐる惡無きが故にてある。如何なる闇室と雖も光りの屆かぬ室は無く、又地面の何處を堀りても光の屆かぬ所は無き如く、此のお慈悲の光りは何物にも碍へられず何處々々迄も到り屆いて下さるのてある。此のお慈悲に出會せて貰うた上からは設ひ惡人だからとて何う斯う言ふ事は無く、罪人だからとて彼れ是れ言ふ事も無いのてあります。此の廣大の惠みより言ふ時は、此の世の中は凡て是れ大悲の御親が此のお慈悲を屆けやう〳〵との御苦勞てある。此のお慈悲を頂いた上から言へば人間何人も此のお慈悲の下に安心させて貰ふ、是れ程尊き事は無いのてあります。

毎に申す事てありますが、此の罪深き我々が信の一念に妙好人、希有人、最勝人てある、眞の佛弟子てある、彌勒菩薩と同じてあると言つて下さるのは何かといふに外ては無い、此の佛の御まこと心、廣大なる佛の大慈悲を頂く時は、入れ物こそ此の穢き我々の肉體てあるが、其の佛の惠み一つて此の淺間しき凡夫の身が彌勒菩薩と等しき果報だと言つて下さるのてある。和讃に宣はく、

五十六億七千萬、　彌勒菩薩はとしをへん、
まことの信心うるひとは、　このたびさとりを開くべし。

一言なれども實に有難い和讃てある。又『信卷』に曰く、

眞に知んぬ、彌勒大士は等覺の金剛心を窮るが故に、龍華三會の曉、無上覺位を極むべし。念佛の衆生は横超の金

剛心を窮るが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超證す。

と。病床お慈悲を喜んて居られる西川君は彌々死なれる一念の夕に大般涅槃を超證し、直ちに佛と仕て頂かれるのてある。彌勒菩薩は龍華三會の曉を待つて成佛し給ふのてあるが、我々は臨終一念の夕に即時に極樂世界に生れさせて貰ふのてある。我々が南無阿彌陀佛々々々とお慈悲を喜んて往生淨土の時節を待つ仕合せは、此世から彌勒菩薩も同じなのてあります。去りながら此世に居る間は、我々は佛の境界は解らぬのてある。若し之が解ると思うて居る人が有つたら夫こそ大騷動てある。如何なる佛智の不思議か知らぬが、此の罪惡の我々を救はんが爲めに、岸上より一條の綱をお放り下された、其の綱が南無阿彌陀佛てましますのてある。我々が此世から其の岸上に登りて、佛の境界が何うてあるか、其の綱が如何にあるか、夫が此世から解る位ならば、我々は綱を投げらるゝ迄も無く、自分から佛に成る事が出來るのてある。岸上の佛境界は唯佛與佛の智見の境界てあつて、我々には解らぬ、唯佛のみ知し召し給ふ處てある。我々には唯眼前明かに南無阿彌陀佛の綱が下つて居て下さる事のみが見える丈てある。其の南無阿彌陀佛の綱は何てあるか。

西岸上に人有つて喚て言はく、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護ん

の御呼聲てある。此の直に來れの御呼聲を承つて、我々は其の儘頂く斗りてある。『執持鈔』の中には此のお慈悲を信ずる一つなる事をお示し下されて宜はく、

往生淨土の爲めにはたゞ信心をさきとす。そのほかをばかへりみざるなり。往生ほどの一大事凡夫のはからふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし。すべて凡夫にかぎらず、補處の彌勒菩薩を初として、佛智の不思議をはからふべきにあらず。云云。

我々には廣大なる佛境界が何事でおはしますかは解らねども、親鸞聖人が法然聖人よりお頂きなされた如く、

若し我れ成佛せんに十方の衆生、我が名號を稱して下十聲に至らん、若し生れずば正覺を取らじ、彼の佛今現に成佛し在しませり、當に知るべし本誓重願虛しからず、衆生稱念すれば必ず往生を得。

で、南無阿彌陀佛の本願の綱が居て下さる事丈けは眞實てある。初め何うしても一心正念になんて成られぬと言はれた西川氏が、今ては「あゝ一心正念々々々々、唯何事は無い、南無阿彌陀佛々々々と一心正念にならせて貰ひました」と言つて居られる。我々には外事は無い、唯眼前此の南無阿彌陀佛の綱が居て下さる事一つが有難いのてある。茲になると我々は理屈が解つて信ずる信せぬぢやない。唯佛智の御不思議と頂く外は無いのてあります。『歎異鈔』の二章には宣はく、

親鸞におきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人のおほせをかうふりて、信するほかに別の子細なきなり。念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべるらん。また地獄におつる業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。云云。

何事のおはしますかは知らねども、佛智不思議の南無阿彌陀佛、頼むは唯此の南無阿彌陀佛ばかりであります。我々がうつかり稱ふる一口の念佛も、佛より直き〳〵に賜はる誓願の網である。人生唯此の網が有るばかり。第十八願の仰といふも外は無い、選擇本願南無阿彌陀佛、往生之業、念佛爲本。「多聞淨戒えらばれず、破戒罪業さらはれず、たゞよく念ずるひとのみぞ、瓦礫も金と變じける」である。唯南無阿彌陀佛の一つであります。善導大師も此の一つである。法然上人も此の一つである。又親鸞聖人も此の一つをお頂きなされたのである。今日の御互も又同じく此の一つを頂くのである。斯く頂くと墨鸞大師の「同一に念佛して別の道なきが故に、遠く通ずるに四海の中皆兄弟なり」といふ御言葉は、實に無限の味ひであります。

猶ほ序に私の感じて居る儘を御話し致すならば、眞實我々の身上に於て何が最も幸福と言ふても、此の如來のお慈悲一つを頂く、此の佛御回向の信心の廣大なる威德を頂くといふ是れ以上の幸福も仕合せも無いのであり升。處が我々は久しく人生の名利に陷つて、如來回向の信心が無上大利の大功德である事に氣が附かぬ、唯徒らに人生的の財寶幸福を求めて苦しんで居るのでありますが、去りながら一度此のお慈悲に氣が附くと人生是程の滿足は無いのである。之に就きて思ひ出すのは大聖釋尊が出家成道せられて鄕里カピラヴアスツに歸へられた時の事であります。カピラヴアスツには御妃耶輸陀羅姫及び御子の羅睺羅が居て釋尊の歸りを待ち受けてお出になる。彌々釋尊のお歸りとなつて、御妃耶輸陀羅姫には佛の事が解ら無い。遙かに釋尊か沙門乞食の有樣にてお歸りになるを望見して、歎き悲みて羅睺羅に言はるゝには、「彼處に來られるのはお前の父上である。早く往きて遺產を願へ」と言はれた。其處て其時十二歲なる羅睺羅は釋尊の許に行き、釋尊の立つてお出になる影に立ちて言はるゝには「此の影甚だ凉し、願はくば吾が父余財を與へ給へ」と請はれた。すると此の時大聖釋尊は羅睺羅の手を取つて林中に連れ歸り、出家得度致させて弟子に仕て仕舞はれた。カピラヴアスツの方ではおほ驚きである。既に釋尊の出家丈けでも大歎きであるに今又淨飯大王の何よりも愛して居られた羅睺羅迄取られたといふので、大歎きであつた。此の時釋尊の仰せられるには「自分に於ては外に我が子に傳ふ可き遺產は無い、唯此の吾が菩提樹下て得たる佛道こそ、是れ實に吾が傳ふ可き何よりもの大寶である」と敎へられたと申す事であります。大聖釋尊の事は我々は形に於て眞似る事も出來ぬ。當流親鸞聖人の一義はあながちに出家發心のかたちを本とせず、捨家棄欲のすがたを標せず、たゞ一念歸命の他力の信心を決定せしむるときは、さらに男女老少を撰ばざるものなり」て、我々は釋尊の眞似する事は出來ぬのであるが、親鸞聖人を初めとして我々親より受ける眞實の寶と言へは南無阿彌陀佛の外にはないのである。此の南無阿彌陀佛を頂いた者を眞の佛弟子と仰せられるは、人主眞實の寶と言へば、此の南無阿彌陀佛の外に無いからである。人生の階級境遇を言へば實に千差萬別であるが、善惡押しなべて眞の頂き所と言へば、此の南無阿彌陀佛の外には無い。若し此の惠み一つを頂かずんば、如何に學問あり才力

有つても人生に生れた眞の所詮は得られぬのであります。

就きて私の感じた所と申すは外では無い、近頃新聞上にも有る如く、今度私共有緣の宗門、有緣の本山で昔から有る種々の寶物を賣り拂はれるといふ事である。之に就きて熟々味はうて來るに此の事は唯簡單に、宗敎上には物質上の寶物は無くても差支は無いといふ丈けの事では無いのであります。實際我々が日常生活に用ゐて居る道具にしても品が變はれば愛づる心が有る。手慣らせば之を離すは惜いのである。況んや寶物て有つて見れば、之を人生的に見る時は、皆夫れ〳〵の趣味もあり、趣向もあり、價もある。夫に對しては多くの人が何より惜しき財を抛つて迄之を求むるのである。況んや宗敎上の意味より言へば、普通世間の寶物とは違ひて或は古來の信者が信仰上より差上げられた物も有らう、或は信仰上より受けられた物も有らう。一として其間に意味の無い物は無いのであります。然るに今は夫を賣り拂はれるといふのである。之は私共うつかり聞いて居つてはならぬのであります。抑々私共一人々々が今日斯くの如く安かに寢ね、安かに起き、安かに暮して居る事が出來るといふは何か、皆な是れ善知識の廣大なる御恩によるものである。も一歩切り詰めて申せば、今日善知識が斯くの如く御苦勞をして居られる。其の御苦勞の一つ〳〵が皆な人の爲めては無い、斯くいふ私が其の御苦勞を御させ申して居る身の上であると思ふと、之は中々容易からぬ事なのであります。去りながら茲に有難き事は、親鸞聖人の御一流では何が一番の寶であるが、何が眞實の寶であるか。「彼の安樂國土は是れ阿彌陀如來の正覺淨華の化生する所に非ること莫し、同一に念佛して別の道無きが故に」で、十方衆生唯此の同一念佛の惠み一つによりて助かるのである。此の念佛を頂く上になると、此世の位置階級の差別も無い。貴きも賤きも此の念佛によらぬ事には救かる道は無いのである。茲になると

大願淸淨の報土には品位階次を云はず、一念須臾の頃に速に疾く無上正眞道を超證す。《信卷》

て、此の念佛を頂く一念に、速に品位、階次を超越して、皆な一味平等の願海に歸入せしめ給ふのである。斯くの如く我々人生の眞實の寶と言へは此の南無阿彌陀佛の六字以外には無いのである。而して善知識今回の御苦勞が又外ては無い、彌々此の念佛の一法こそ人生最後の寶である事をお知せ下されたに外ならずと私は頂くのであります。耻しけれども私共は此の樣な問題に對しては餘り深い意義を見出す事を知らぬ、つい淺墓に考へて、世間の財寶何ぞ宗敎に用あらんやなどゝ甚だ冷淡に思ひ過し易いのである。之は誠に懺悔に堪えぬのであります。夫等の澤山の寶物が長い間に本山に集つたも、惠みより來り敎より顯はれたのである。夫が今又出て行くも廣大の思召しのある事と頂き上る事である。來るもお惠みなれば、去るもお惠みである。惠みの一に更に變はりは無いのであります。我々も此のお惠みによりて此世で働かせて貰ひ、此のお惠みによりて又安樂淨土に往かせて貰ふのである。往くも南無阿彌陀佛なれば、住るも南無阿彌陀佛である。法然上人は何時如何なる時も南無阿彌陀佛ならざる時は無い。三心具するに就けても南無阿彌陀佛、三心具せざるに

就けても南無阿彌陀佛とお示し下されてある。又先年物故せられた播州の後藤祐護師が往生前に非常に喜ばれた御言葉は、

極重の惡人は他の方便無し、唯彌陀を稱してのみ、極樂に生るゝことを得。

極惡深重の衆生は、　他の方便さらになし、
ひたへに彌陀を稱してぞ、　淨土に生るとゝきたまふ。

極重の惡人、他の方便なし、唯彌陀を稱してのみ、極樂に生るゝことを得てある。此の唯の字が有難いのであります。又『歎異鈔』には「親鸞におきてはただ念佛して」と仰せられ又「よろづのことみなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに、ただ念佛のみぞまことにておはします」と申されてあります。

反す〳〵も信仰の一念に至りては唯此の惠み一つであります。此の惠み一つを頂く一つて四海の人間、善人も惡人も聖者も凡夫も、皆な一味平等に眞實の淨土に往生を得るのてある。嗚が我々此の廣大の惠みに遇はて頂いたといふ事を何ても無き事のやうに思うて居るが、之は非常な御緣によるのてある。和讃に曰く、

如來の興世にあひがたく、　諸佛の經道きゝがたし、
菩薩の勝法きくことも、　無量劫にもまれらなり。
善知識にあふことも、　おしふることもまたかたし、
よくきくこともかたければ、　信ずることもなをかたし。
一代の諸經の信よりも、　弘願の信樂なをかたし、
難中之難とときたまひ、　無過此難とのべたまふ。

西川さんが此の信仰を獲るといふ事は、之は中々六かしいぞ、中々解らぬぞと言はるゝ如く、實に之は六かしいのてあるけれども佛力て之が解らせて貰ひ、大願業力て極樂に生れさせて貰へるのてある。玆の處が曇鸞大師の「阿彌陀佛の正覺淨華の化生する所に非ること莫し」と言はれた所であります。聖人は又之を和讃に宣はく、

如來淨華の聖衆は、　正覺のはなより化生して、
衆生の願樂ことゝく、　すみやかにとく滿足す。

而して此の如來淨華に左訓をつけ給ひて

淨華といふは阿彌陀のほとけになりたまひしときのはななり、このはなに生ずる衆生同一に念佛して別の道なしといふなり。

とある。即ち阿彌陀佛の正覺淨華といふは、佛が第十八願に於て十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺とお誓ひ下された、其の本願御成就下されて佛と成り給ひし時の華てある。我々も此の本願力に從ひて同一念佛の惠みにより極樂に往生させて頂く時は、此の正覺淨華の中より生れさせて貰ふのてあります。

偖て斯の如く頂く時は、我等に於ては最早や何等の心配も無い。唯廣大なる願力を仰いて御計ひのまに〳〵暮す斗りてある。生あれば生、死あれば死、生死も敢て恐るゝに足らぬ。若し慶んて死ぬ無つたら、力なくして終るとき彼の土へは參らせて下さるのてある。も一つ言へば極樂に參るも參らぬも無い。唯廣大願力の御計ひに任せ奉る斗りてあります。「和讃」に宣はく、

大願海のうちには、　智愚の波こそなかりけれ、
弘誓の船に乘りぬれば、　大悲の風にまかせたり。

我も人も共に此の廣大願船に乘托して一味の信心を喜ばせて貰ひ、相連れだつて佛の淨土に往生して一味平等の證を開かせて貰ふ。此の廣大の仕合せを得奉る事の出來るも如來大悲の親が居て下さるからてあります。我々が極樂淨土に往生して親の周圍に圍繞する有樣を善導大師は『般舟讃』に宣はく、

父子相迎へて大會に入る、即ち六道苦辛の事を問ふ、
或は所得人天報あり、　飢餓困苦髓に痞を生ず、
爾の時彌陀及び大衆、　子の苦を說くを聞て皆傷歎す。
彌陀諸佛子に告げて曰く、　自作自受他を怨むる勿れ。

まことに難有き御文であります。

華嚴經に言はく　信は道元功德の母と爲す、一切諸の善法を長養すればなり、疑網を斷除して愛流を出て、涅槃無上道を開示せしむ、信は垢濁の心無し清淨にして憍慢を滅除す、恭敬の本なり、亦法藏第一の財と爲す、淸淨の手と爲して衆行を受く。信は能く惠施して心に惜しむこと無し。信は能く歡喜して佛法に入る。信は能く智功德を增長す。信は能く必ず如來地に到る。信は諸根をして淨明利ならしむ。信力堅固なれば能く壞るものなし。信は能く永く煩惱の本を滅す。信は能く苦ら佛功德に向へしむ。信は境界に於て所著なし、諸難を遠離して無難を得しむ。信は能く衆魔の路を超出し、無上解脫の道を示現せしむ。信は功德の爲に種を壞らず。信は能く菩提の樹を生長す。信は能く最勝智を增益す。信は能く一切佛を示現せしむ。是の故に行に依て次第を說く、信樂最勝にして甚だ得ること難し。

聖傳

ヂヤータカ釋尊傳

第廿七　豚を嫉みし牡牛の話

世尊ジエタバナにおはしゝ間に或僧が肥えたる娘に誘はれんとせし事に就き譚りたまへり。こはナラダカツサバの誕生物語に委しく說かれたり。

時に師は僧を呼びて問ひたまはく、「汝は戀愛に陷れりと云へるが眞なりや」と。

「そはまことなり、世尊よ」と答へ奉れり。

「さらば何人につきてなるか、」

「世尊よ、其は彼の肥えたる娘の誘惑によりてなり、」

主のたまはく、「おゝ僧よ、彼女は汝が上に魔事を興ふるなるべし、前世汝は彼女の結婚の日既に汝の命を失なひて群集の爲に食となりしなり」とて次の譚を談りたまへり。

昔ブラマダツタベナレスに國を統べたまひし時、菩薩は或豪家の牡牛に生れたりき。名は「大赤」と呼ばれぬ。彼は「小赤」と呼ばるゝ弟を持ちぬ。而して總て此家の家蓄の仕事は此二人の兄弟の牡牛にまかせられぬ。

其家庭には唯一人の愛娘ありけり。時に隣村の位置ある若人と婚成りぬ。

彼女の親はおもへらく、「娘の婚禮に集り來らん人に馳走と

せん」とて豚を飯にて肥したり。かくて彼豚の名は「腸詰」とよばれぬ。

「小赤」はこの樣を見し時、彼の兄弟に問ふて曰く「兄よ、我等に總て家苦の世話はゆだねられたるに、人々は我等には、たゞに、草や藁のみを與へて、彼豚にのみ煮たる米にて育てらるゝは如何にや」と。

「愛する小赤よ、他の食物あり唯に彼を嫉む勿れ、彼哀れなる豚は死の食を喰ひつゝあり。人は彼の娘の宴の爲に美味をしつらへんとて豚を肥すなり。數日を出ずして汝は見るべし、人は來りて肥えたる豚を捕へ、脚をもちて引づりゆき、豚小屋の外に引出して命を奪はん、而して客人の爲に甘きカレーを作るべし」と。

かくいひつゝ次の偈をいひぬ。

かの腸詰をねたむなよ、
かれの喰ふは死に行く食
汝の糠を滿足し
喰へば命長きなり。

而して程なく人々は來りて腸詰を殺し、さまざまに料理しぬ。

時に菩薩は「小赤」に曰く、汝は「腸詰」を見たりや我愛する者よ」、

「我は見たり、兄よ。哀れの「腸詰」の善き食の報を、我は彼の米よりも百千倍我等の草や藁や糠の食を愛す、如何となれば其は何等の害をも及ぼさず我等の命は長かゝん」と。

師曰く「此の如し、オヽ僧よ、汝は既に前生に汝の命を彼女が爲に失なひて多數の人の爲に喰はれぬ」とて、例を畢り次に眞實を說きたまへり。眞諦を說き畢りたまひし後、彼の戀に溺れし僧は第一の懺悔をなし確と立ちぬ。かくて本生譚により過去の因緣を示して曰く「腸詰」と云はれし豚は汝にして、「小赤」はアナンダ「大赤」は我身是なりとのたまへり。

第廿八　獸に慈悲あれ

世尊ジエタバナにおはしゝ時、僧が水を漉さずして飲みし事に就き次の譚を話したまひぬ

友なる二人の若き僧、サーツワチより田舍に行きぬ。愉快なる土地の樣とて、いたく彼等の心にかなひ、ながく其處に止まりぬ。やがて世尊と共ならんとてジエタバナの方へと志ざしけり。

彼等の一人は水漉器をもち、他は是を持たざりき。されば彼は一時に二人のむに足る丈を漉し居たり。

一日彼等は小さき爭論をなしぬ、漉器もてる僧は他に是を貸さんとせず、己れみに恣に是を用ひて水を飲みぬ。他は漉器なければせん方なくして飲まずありしが、渴に堪へかね遂に漉さずして水を飲みたり。

程よく彼等はジエタバナに着しぬ。師を拜したる後座を取りぬ。

師は彼等を歡び迎へたまひて「汝は何方より來りしや」と。

「世尊よ、我等はコサラの地なる一村に長く滯在なせしが其處を辭して君を伺ひ奉りぬ。」

「さらば我は汝等睦まじく和して來れる事を望む」と。

此時彼の水漉もたぬ僧は答へて、「世尊よ、此僧は道にて諍論せしよりおのれのみ水漉をもちゐて我には貸さゞるなり」と云ひぬ。

されど他は爭ひて曰く「主よ此僧は水中に生物ある事を知りつゝも、水を漉さて飲みたり」と。

「オヽ僧よ、此僧の云ひしが如く汝は生物ありと知りつゝ漉さゞる水をのみしか」と問ひたまへり。

「然り、世尊よ、我は其如き水をば飲みぬ」。

時に世尊曰く、「或處に賢者ありけり、オヽ僧よ、天に下界を統べてありしが、或時戰にまけて大なる深き溪谷にそひて逃れし時、彼の車を止めて曰ひぬ。我等は至尊の爲に生物に苦痛を與へざれとて、彼等の大榮光を犧にして、剩さへおのが命をもサバツナスの若者の爲にすてぬ」とて、譚を始めたまへり。

昔マガダの王マガダ州なるラージャガハに統べたまへる時なりき。菩薩は(恰も彼は今サツカ族なるが如く、嘗て亦マガダなるマカラの村に生れ給ひし事ありき)貴族の息子として其村に生れ給へり。命名の當日彼等はマーガア王子の名を與へ、成長せしとき若き波羅門マーガアとして知られぬ。

長ずるに及び彼の父母は彼が爲におなじ階位の家より夫人を迎へしめ、數多の王子王女誕生して家は益々榮を繁り、彼は大施主となりて常に五戒を保ちたりき。

其村には三十戶の家族ありき。一日此等の家族の人々は町の中央によりあひて、或は共に議すべき事を談じ合へり。菩薩は彼の足もて下の土塊を除き立おのれの立つによき樣になしぬ。されど他の者は又來りて其處に立ちぬ。菩薩は又他の者の爲に土地を滑かにして立ちやすくせんとて其處に動きぬ。次の者は順次集り來りて其土塊の上に立ちぬ。かくして菩薩は屢々試みて遂に三十人の爲に便利なる立つ場所を作し遂げぬ。

次の時期には菩薩は嘗つてありし屋根なき小屋を倒して大堂を建て、周圍に腰掛を擴げ水瓶を用意したり。他の時期には菩薩は彼等三十人とよく和解して五戒を彼等にしかと植えつけぬ。以後菩薩は人々と共に信の行を繼續したり。

彼等は朝まだき疾く起き出てゝ鎌と鳶口とをもて立ち出て、鳶口をきて四街道や村道に於ける石をば碎きて是等を去り、荷車の通路を塞ぐ樹木を切伐し、荒地を平坦ならしめ、街道を作り、池を掘り、公堂を建て、施物を與へ、戒を持す等、さまざまに公益をはかりしかば、村民一同よく菩薩の忠告をきゝて戒を持しぬ。

村の長はおもへらく「我は村民が强酒をあほり、殺生をなし、破戒せし時恣に稅をとりあげ賄賂をむさぼり、大におのが懷を肥せしが、今マーガアなる若き波羅門は持戒を勸め殺生を禁じ、又總ての惡事を止めしむ、我は必ず仇をなすべし」と。

而して彼は王に猛りて曰ひける樣「オヽ王よ、我村には强盜の一群村を劫掠す」と。

「行き彼等を捕縛し來れ」と王は云ひぬ。

彼は行きて此等善良なる人々をば囚人として捕へ來り、王に此等は先に云ひし盜賊の一族也とまことしやかに讒言したり。されば王は一言の裁判をもなさずして直ちに彼等を象も

て踏みにじれと命じぬ。

人々は彼等を法廷に横たへて象を連れ來れり。菩薩は彼等を慰さめて言く、「心に深く戒を持せよ、彼等總てを一殺戮人、王及び象一汝自身に對して無謀なれば其れほどに親切の感をもて深く心に戒を持せよ。と。彼等はしかなしぬ。

時に人々は象を導びき來りぬ。人々は極力彼を率かんとすれど、不思議や象は些かも命ずるが如くせずして大聲を發して、吠えたけり、逃れ出てんとせり。されば人々は他の象、又他の象とつれ來れど如何ともすべからず、皆一樣に第一の象の如くなりき。皆悉く逃げ去りぬ。

「彼等の所持品のうちに何か藥をもてるにあらずや」と、王は審しみ人々に調べしめしが何物をも得ざりき。

「さらば必ずや彼等は何等かの咒文を稱へしに非ずや、彼等に尋ねみよ」と命じぬ。

役人は彼等に問ひぬ。時に菩薩は我等には咒文ありと答へたり。是を王に告げ奉りしに王は「汝の知れる咒文をば悉く語れ」と命じぬ。

菩薩は立ちて王に向ひて曰く「オヽ王よ、我等は此の外に何等の咒文をも有せず、そは我等は一艸の草にても殺生をなさず、我等に與へられしものに非らざるを他より取らず。戲語、僞言を言はず、酒を飲まず、己は自身慈悲心に住して布施をなす。即ち荒地は平坦になし、池を掘り休憩所を作事等、是れ我等の咒文即ち則なり、此は我等の隱家にして此は我等の力也」と。

時に王は大に彼等を信じ、彼反間者なる村長の家財をば悉く彼等の間に分ち與へ、彼をば彼等の奴隷に爲しぬ。象をも亦彼等に與へられ一村をも賜はりぬ。

以後彼等は又自由に慈善の行をなしぬ。彼等は建築師を迎へて四の街道のあえる處に一の公の休憩所を造作しぬ。彼等は婦人を好まざりしかば一人も婦人に此善行を分たざりき。

折しも菩薩の家に四人の婦人ありけり。名は信、思、喜愛、善生と呼ぶ。信は一日建築師一人に逢ふ機を得たりしかば、彼女は彼に金を與へて「妾をも休憩所を造營する一助たらしめよ」と頼みぬ。

彼は是を爲さん事を約しぬ。彼は他の仕事を始むる前に乾きたる材木の片を持ち來りて測りぬ。而して是を尖塔の如く作りて布片につゝみ隱しおけり。時經てもはや堂も完成に近づき、もはや尖塔だに附すれば事了すと云ふ折しも建築師は云ひぬ。

「我は一品用意するを忘れしものあり。」

「そは何なるか」と彼等は一聲に問ひぬ。

「そは何ぞや」と。

「我等は小尖塔を得ざるべからず。」

「さらば何處ぞより持來らしむべし。」

「されどそは今切りたての木にて作る事能はず、よく乾燥したる木に非ざれば出來ず。我等は、とくに尖塔を切りて作りおくべき筈たりし」と歎じぬ。

「さらば如に何せん。」

「汝は何處へか行きて小尖塔の賣物なきやを探さざるべからず」。

されば彼等は其處此處を求め歩きしに、かの「信」といふ婦人の部屋の前に一を見出しぬ。されどそは金もてうらずといふなり。「若し君等かの公堂につき我も善行を分ちくるればこを與へんに」と彼女はいひぬ。

「否」と我等は答へぬ。「そは婦人のかゝはらざる所と規定しあれば許しがたし」と。

建築師は口を出して曰く「君等よ、そは何たる事をのたまふか。フラマ天人の天上世界をのぞきて女人のすまぬ世界はなし。尖塔をとく受け給へ、さらは我業はもはや成らんに」と。

漸く彼等は諾しぬ。遂に尖塔を受け休憩所は成就しぬ。彼等は其中に腰掛を作り其に水を入れたる瓶を多く供へ、斷えず炊ぎし飯をしつらへおきぬ。堂の周圍は壁をめぐらし、門をつくり、壁の中には砂を撒き擴げ、其外側にはバルヌラ樹の列樹を植えぬ。

「思」は彼處に遊園を作りたり。そはいと完全せるものにて或特種の果實の樹、花の樹、一として其處になきものあらずといふことなし。

「喜愛」は其處に池を作り、五種の水百合をもて掩ひぬ。いかに見るべく美なるかな。

「善生」は何事をも遂になさゞりき。

菩薩は七の義務…母を支へ、父を支へ、長者を敬ひ、眞實を語り、微しき言語を用ゐず、他を虐待せず、我を通さず、嫉妬、貪欲の心を起さず。

親を養ふ人々も
長者うやまふ人々も
やさしく親しく語る人。
他をば殺さず、無私にして
眞に、しかも自制あり
三十三の天使等も
彼を正義の人となす。

かゝる讃辭を彼はうけたり。彼の命終の後大三十三天の天使の國に生じ、神の王なるサッカの如くなり、彼の友達亦彼處に生れしといふ。

當日大三十三天に於てチタンといへる族入り來りぬ。サッカ曰く我天に他の者を住せしむるに何の利かある。」とて神の飲物をチタン等に飲ませぬ。されば彼等は醉人の如くなりぬ。サッカは彼等を脚もて捕へ、シネラ山の險山の上に投げぬ。

彼等は今も「チタンの床」といはるゝ場所に落ち來れり。其場所の大さはターバチンサ天ほどもあり。

其中に一樹あり、サッカ天の珊瑚樹の如し、そは一カルバ立つと傳へらる、其名は色どれる喇叭花の樹といはれぬ。

彼等は喇叭花の花盛りなるを見て漸く知りぬ。

「あな此處は我等の天にあらず、我等の天には珊瑚の花ありしに」と。

やがて彼等は言ひぬ「彼の老サッカ我等に酒を飲ませ下界へ落せしなり、而して我天の町をとりしなり、」と叫びぬ。かくて彼等は決心をなして曰く、「いざ我等の天の市を取り返せ、いざ戰はん」とて彼等は恰かもシネラ山の峻岳頂へ蟻の如く

群り集ひぬ。

サツカは叫を聞き、「チタン來れり」とて彼等に會せんとて大谿に下り、其處にて空中より戰ひぬ。

されど此時如何なる故にやサツカはあまり利なくして天の南隅の空隧にそひて彼の名高き直徑百五十リーグなる戰車、榮光の戰車といへるに乘りて逃れんとせり。

彼の戰車迅速に大谿を下り行きし時、絹棉の樹の森といへるをよぎりしに、轍の爲に絹棉の樹は後より〳〵ふみ倒されバルミイラ樹の如く切り倒されて大載されぬ。鳥の雛等は逃ぐるによしなくさまよひて中には殺されたるも數多ありき。チタン等は大聲吶喚して今や迫らんとせり。サツカは彼の戰士マータリに問はく、

「かの音は何ぞやマータリよ如何に悲慟の叫に非ずや、」と問ひぬ。

オヽ主よそは絹棉の森の倒るゝ音なり、君の戰車の勢に觸れて鳥類の死の怖もておのゝき共に叫へるなり。

大聖は、時に宣く、「オヽ我がよきマータリよ、これらの生物を我等が爲に惱ます勿れ、我等はおのが靈物の長なる故をもて生類に苦を與へじ、我は彼等の爲に我が命をチタンに犧牲に與ふべし」とて偈を唱へぬ。

き棉の森にすくふ鳥
オヽマータリよ轍、より
のがれしめてん、我命
よろこび彼に與ふべし

さらば小鳥はすくわれん。

さればマータリは直ちに車を止め他の方向に向けて天に急ぎぬ。チタン等はサツカの戰車の止まりしを見ておもへらく「必ずや他の天使の世界より加勢に來れるならんされば今陣を取りかへて新手の兵もて向はんが爲にかく止まりしならん、いざ一時もまつないざ逃げよ」と、死の恐怖もて雲霞とチタンの床に逃け返しぬ。

サツカは天の市に還歸して兩天より來れる天使の群にかこまれつゝ中央に立ちぬ。折しも榮光の宮の歡喜の聲は地を通して一リーグの高さに上りぬ。而して此勝利の最後に此宮成就しければ榮光の宮とよぶなり。

サツカは五ツの場所に護衛をおき又もやチタン族の襲來を防禦しぬ。サツカは偈をいひぬ。

二つの勝てぬ市の間
五重にかたく護衛おき、
そは蛇、鳥や、小人や
小鬼や、四天大王や。

サツカはかくの如く護衛を置き、天使の王として天の業を樂しみぬ。時に先の「信」なる女はおのが在世の姿をかへて彼の侍女として比天上に再生したり。而して彼女の尖塔の寄附の功德により彼女の爲に「信」の名の下に一つの寶石をちりばめし精舍建立せられたり。其處には常にサツカ天使の王として白き天蓋の下、金の玉座によりて、天使及び人に對しておのが務を取るなり。

「思」亦在世の姿をかへて彼の侍女として天上に生れぬ。彼女が遊園を寄附せしをもて、其功德により、「思」の葛園の名

にて遊園地出來せり。

「喜愛」亦在世の姿をかへて侍女として生れぬ。彼女の世に在りし時池を寄附せし功德により亦池は生じぬ。こは「喜愛」の池とよばれぬ。

されど「善生」は德の行をなさざりければ、或池の牝鶴と生れぬ。サツカは一人言して曰く、「善生の徵は何處にも無し、如何にかしつる」と。かく彼は彼女を池に見出すまでこれを知らざりき。

一日池に到りて彼女を連れ來り、「信」の堂「思」の葛園、「喜愛」の池等を見せしめて後、彼女を誡めて曰く「彼等は慈善の行によりて我天の侍女に生れしなり、されど汝はかゝる業をせざりし爲め鳥と生れぬ、されば以後よき行をなせ」といましめぬ。

かく彼女に五戒を授け、又彼女を取りて放ちやりぬ。其時よりは彼女は正しく住したり。

數日を經て、サツカは彼女が善行を持するや否やを見るべくゆきぬ、彼は彼女の前に魚の姿に變じてあらはれぬ。死せりとおもひて、鶴は嘴をのばし頭をとらへんとせしに魚は其尾を振ひたり。

「あな生けり」と彼女は叫びて逃しやらんとせり。

「善哉善哉」とサツカは曰ひぬ。「汝はよく戒を持せり」とて立ち去りぬ。

彼女は再び姿をかへし時ベナレスの壺屋に生れたり。

サツカは前の如く彼女の何處に在るかを見出して、金色なせる唐茄子を滿載せる車の上に村の老婆になりて座し、彼女の家の前に到りぬ。曰く「唐茄子を買ひ給へ〳〵」と。

「人は來りて彼等をもとめんとせり」。

老婆曰く「我は正義を守る人にのみ此を賣らんとす。汝はかゝる正義の生を送るや」と。

「我等は正義などいふ事は知らず、金出せば唐茄子を與へよ」と彼等は曰ひぬ。

「我は金を要せず、我はたゞ正義を要す」と答へぬ。人々呆れ果てゝこは狂女ならんとて彼女を見捨てぬ。

「善生」は是を聞きおもへる樣、こは我に對していへるならんとて行き唐茄子を買はんとせり。

「汝は正義の生を經る貴女よ」と問へり、「然り我は然り」と答へぬ。

我の此等總てを持ち來りしは唯汝一人が爲なりし」と老婦は答へ、唐茄子悉くをば車のまゝに彼女に與へて老姿は去りぬ。

善生は一生正しき道を歩みて送りぬ。次に彼女死して他生に移りし時誤解の息子と宇せられたるチタン人の娘に生れぬ。されど德の功德によりていと優れて美麗になりぬ。彼女長ぜし時彼女の親娘に懌せんとてチタン等を集めぬ。サツカは先の如く何處に彼女在るやを尋ね居たりしが遂に彼は此チタン人の家に娘として彼女を見出したり。彼はそを見出すや否やチタン人の形となり其場に到りぬ。おもへらくもし婿を擇まゞ必ずや我は彼を取らんと。

人々は善生を面會室へと美しき打扮にて打連れぬ。彼女におのが婿として欲する人を擇ぶべしと告げぬ。彼女は稍あり

て人々を見始めぬ。やがてサッカを見出し前世よりの因縁によりて遂に彼女は感じて云ひぬ。

「此は我が良人なり」とて彼を擇びぬ。

サッカは彼女を天の市に導ぴき彼女に名譽の役を與へたり。而してサッカは彼の定業によりておのれの行に遵じて去りにき。

師は此說敎を畢りし時、彼は僧を靜に戒めて曰く、「如此く昔の賢者は天を統べし人だに殺生を犯すよりおのが命を捨てにき。然るに汝は信仰に導かんとて僧となりし者が生物のありとしりつゝも漉さぬ水を飲用するは誤れりとて本生譚を結び給ひぬ。

「當時のマータリはアナンダにしてサッカは我身是なりき」と。

「御一代記聞書」第二百六十一章に、蓮如上人が「ただ佛法に心をかけよ」と仰せらるるは、餘のことなしに佛法ばかりに心をかけよと仰せらるる也。若し然らば、世間の王法も仁義もすてて、佛法ばかりに心を掛けよと仰せらるる也。若し然らば、世間の王法も仁義もすてて、佛法ばかりに心を掛くべきかと云ふに、當流はながく墨道の法門に異なりて世間の王法仁義までも攝めて佛法としたまふ、守る所の相につけば、王法を表とし佛法を內心にたくはへよとのたまへども、この守る心を云へば一切世間のことまでも此の佛法の上より取扱ふが眞宗の掟なり。依て「全」第九十七章には、蓮如上人仰せられ候、當流には總別世間機わろし、佛法のうえより何事もあいはたらくべきことなるよし仰せられ候」とあり。爾るを動もすれば佛法より云へば然るべきことなれども、今日王法に缺けてはすまぬぞと申して、佛法を離れたる世間にしなすことは、當流の掟にかなはざること也。今は佛法に離れたる世間に簡んで、唯佛法に心をかけよとのたまふ也。（香樹院語錄）

告白

善巧方便奇なる哉

在大坂　山崎震雷

本年七月九日の消印にて、求道誌御編輯の御方より、恩師近角先生の御傳言なりとて、此の見る影もなき罪惡の塊なる私が、いとも難有慈悲の塊なる御親を仰ぎ信する狀態を告白せよと、勿體なき程御叮嚀なる御勤めの御玉章を賜はりましたが、私は過ぎし五月末來一時は危篤の宣告を醫師より受けし程なる重き腦病に惱り、此の七月に入りて漸く床を離れて今は辛ふじて健康を恢復しつゝある身故、迚も語にも文にもなりませぬが、唯だ計らはず心に浮ぶ儘を記して恩師並に讀者姉兄の御垂敎を仰ぐ事と致します。

入道の動機と申しても、私には本誌告白欄に屢々現はれしいとも芽出度き法の友達の樣なる水際立ちて妙相の表はれし事は一もなく、言はゞ平穩なる中に此の有り難き道を求めさせて頂きましたのてありますが、一寸其の梗概を述ぶれば、年月はなか〳〵短くないのでありまして、御親樣の善巧方便も亦いかばかり奇なる哉と、私は想へば想ふ程難有感謝させて頂き居ります。元來私は農家に生れましたので、今も尙ほ農事は亡父母の敎に一通り覺へさせて頂き居りますが、私の六七歳の頃に早や父母に勸められて御寺へ連れて參らせて頂き、家庭に在りては父の導師に朝夕佛前に正信偈和讃を助音させて頂き居りましたが、別に有り難いとも嬉しいとも何ともいふ感じはなく、唯だみほとけ樣は尊い方で、朝夕は必ず禮拜供養して勤行すべきものと心得居たのてあります。ある年盆歟御涅槃歟は慥かに覺へませぬが、御寺に參詣致しましたれば、往生要集の地獄極樂の圖が掛りて居りました。繪畫を好む小兒心に近きて拜觀致しまするうちに、私より年も十四五上なる私の從兄が其處へ參りまして、此れが地獄で閻魔廳が何と一々指して地獄極樂の繪解をして呉れまして、善惡勸懲の意味を話して呉れました。其の中にて兩玻璃の鏡といふがありて、如何に奸智に長けてものも此れに向へば是非服罪せねばならぬと云ふ感じが、强く少さき腦漿に刻み込まれました。以來何とはなしに未來の極樂を想はずして唯だ地獄の恐ろしきことを感じ、其れが九歳の頃に益々度を强めて惡事を恐れましたが、小兒の悲さには復た忘れて峰蝶を遂ひ、魚類を捕ふるなど致します。が其の後は復た殺生の恐るべきを祖母より諭されて、再び地獄を恐れ後悔の念を起し居りました。處が此の祖母がまた無類の信念深き人でありまして、常に私を抱き寢し、其の物語りは五戒の俗話と佛陀の御慈悲とでありましたのが私をして心機一轉せしめ、今度は地獄を恐るゝと同時に極樂の樂しき感を稍や起させて頂き、唯だもう佛前に參り御寺に說敎を聽くより恐怖を免れて歡樂を得る道なしと思はしめました。併し思ひのみにて心は依前として實際に符號しませぬ。其の後に小學校も卒へ、私塾に通ふ樣になりましてから、種々敎師より聞く話が念佛者を誹謗し地獄極樂を否定する傾きがありましたのに遂に釣り込れて、此の地獄極樂否定說が却りて高尙て氣樂な樣な感じを生じ、追々年の長くると同時に農事をも手傳ふ事となり、一時はまた未來の觀念を忘れて了ふた樣な風になりましたが佛前の勤行丈けは家庭の常規と心得て致して居りました。

處が農事中に私の第一に困難を感じたのは、修季寡水の時に我田引水の論爭でありまして、之が私の樣な氣弱な者は兎時も敗北して我田に引水し得ずして歸る、歸れば下女下男迄が私を意氣地なき者の樣に思はるゝのが苦しく、迚も此の身に農事は不可能なりと思はめた事は度々にて、同時に復た善惡因果の說が心內に頭を持ち揚ぐる樣になり、前に捨てし寺參りをも再び始め、有り難そうなる御說法を聽くと今度は其の僧侶其の人迄が有り難き心地して、常に佛陀に事へて經文を誦し口に御念佛を絕たず佛緣に親む寺院生活が、如何ばかり樂しからんなどと羨ましくなりました。乃て一日父に向ひ我が身の農事に適せぬことを述べ、學校敎員歟將た僧侶となりて生活したき旨を話しまするとと、父は敎員となりて小供大將とならんよりは、僧侶となりて自信敎人信すべき事を諭されましたので、私は直に父の許を受けて某寺に入り、某寺の和尙樣より三部經の正音讀を最初に授かり、領解文の御講話をも敎へられました。斯くして寺院に出入し又僧侶方と御交際を致す樣になりますと、何時の間にやら寺々の樣子も分り自然に僧侶社會の內容が知れますと、今度は曾て他所の花麗はしと羨みし寺院生活の僧侶社會が案外に想はれ、私には其の俗より出でゝ俗よりも俗なる裏面のみが目に着き初め、却り

て僧侶生活が嫌氣になり、一時は中止せん歟と迄も想ひましたが、併し其れては全く人生の歸趣を失ふことを慮り、進退谷りし末茲に私は一大勇猛心を生じた心地にて、此は自から明師を尋ねて此の腐敗せる僧侶社會を改革し、進みて佛燈を輝かするに如かずと決斷しては、復た矢も楯も叶はぬ思ひが致しました。乃て時しも明治十七年四月中つ頃住みなれし京都を出て、獨り（最初は同窓兩三名なりしが何れも非蔑の子弟にて其の父兄より中止されたり）廣島市の進德教校の有望なる風評を慕ひて入學せんと大坂の川口を解纜しました。僅かに知人を手寄りて同市に着き、目指す知人に就きて聽けば、同校は今學期中途にて入學を許さずとのことなりしかば、轉じて九州行を企て豐前の宇之島に東陽勸學を尋ねて廣島より八九十里の長途を陸行して辿り着きしは全年五月五日でありました。直に全勸學師の帷を垂れ給へる全町小今乘桂翁の乘桂黌に入學して、全師の懇教を仰ぐ事殆んど四年の久しきに亘りました。茲に全師は該博なる學識と深厚なる信念とを以て諄々教へて倦み給はざれども、唯だ學理にのみ心走る私には教義安心の理論と哲學的研究にのみ傾きて、斯程の明師に遇ひ乍ら人生の歸趣たる實驗の信仰を得ずして空しく過ぎしのみならず、強ひて之れを求むる意もなく、唯だ僧侶社會の腐敗を慷慨して柄にもなき教界刷新呼はりをも敢て爲る痴態に陷り、遂に時勢云云（此の時は校主乘桂翁も月に幾度か閉鎖の非運に接せり）を口實として京都に還り、本派本願寺の普通教校に入學せしは明治貳十年末でありました。夫れより全校は文學寮と改まり、東京に移りては高輪大學と化して今の佛教大學となりましたが、私は在學拾年を經て漸く全校を卒業しました。

此の間には復た求道の念切りに起り、或は種々なる會を組織して同志と共に師を招きて御法を聽き、或は獨り大家を訪ふて道を求めましたが、教理安心は既に東陽師の門下に研究せる事とて、何時も理行の符節を願ひて尚も道を得ず、其の苦悶懊惱の極は我は得られぬ者と殆んど斷念しかゝる事も屢てありましたが、然りとて敢て之れを捨て得ざりしは今想ふに全く佛陀大悲の離し給はず常照護の御力に引き付けられしと感謝に堪へませぬ、南無阿彌陀佛。斯くて全校卒業后は本山より東京に留學を命ぜられ、其の指定の研究をも卒へて、明治三十三年八月頃山命に依り前橋市に出張を致しましたが、此時は以前の師あり友あり食ふに物ある書生といふ溫室中の花が始めて知る邊なき社會の風波荒き曠海に、曾て乘り手たりし身が一朝に乘せ手の位置に出ていゝ、而も我は乘るべき船をも持たぬのでありましたから何とも手の着け樣もなく、實に恃みなき身なることがシミ々々我が身に感ぜられました。時に豫て東陽師より常に教へられました絕對の他力にて正信偈の御垂教にある邪見憍慢惡衆生信樂受持甚以難難中斯難無過斯の觀念が不圖心中に浮かませて頂き、大に慰安を得させて頂きし心地して嬉しく感謝の御念佛を唱へさせて頂きました。

一日全市の某書林に群書を漁る中に、著しく私の視線に觸れましたのは近角先生の御著信仰之餘瀝と云ふ表題でありました。其處で私は飛び付く樣に其の書を手に取り、直に代價を拂ひて一部を講ひ、早速歸寓して先づ序文を讀み、次に宗教的同朋の一章を讀みますると、丸て私の心理經程が書き現

はされてある樣なる感じが致しまして、殊に打つ手の下から涙を以て見上げてくださるなどの絕對無限の御慈悲を御述べなされてある所に至りては、御親に對する不孝の我が罪惡に泣かずと居られぬと共に、此の御力の如何に强く如何に有り難き歟に、感謝の御念佛は不思議にも我れを忘れて口を衝き出る嬉しさは、迚も此の病後の亂筆粗語にては書き現はすことは不可能にて、人生の重荷は消へて跡なき感御法の讀者姉兄方に御諒察を願ひます。夫れから他の人々へも此の書の購讀を御勸め致しましたが、全地は極めて宗教に冷淡なる處でありまして、私も故ありて其の翌年は廣島に教鞭を執る身となりましたので、爾後は全地宗教界の消息を知る事を得ませなんだ。然るに明治三十三年は恰も恩師近角先生が御洋行中て、私は未だ一度の拜眉をも得ませぬので常に未見の恩師と唱へて崇仰致して居りましたが、爾後四年間程廣島に在りて、全三十七年三月大分縣大分町へ山に依り出張致しまして、今四十二年四月に至る迄て全地に在りて、全地の三浦輝太郎君荷堂弦君菅原義丸君等の有志十數名と共に、大分求道會なるものを組織し、月に貳回宛會合して歎異鈔安心決定鈔等を講本とし、各自の感慶を談じ合ひ、夫に無限大悲の親心を讃嘆させて頂き升うち、昨年春期には近角先生の九州御傳道の御企てがありましたので、大分町へも全年四月十三及十四日の兩日間私の寓居なる臨濟禪（元曹洞）長福庵に御招待申し、御講話を親く拜聽させて頂きましたので、何とも云ひ知れぬ有り難き御緣を結ばせて頂きました。爾來は求道誌を拜讀致します毎に自然と先生の御容貌は心中に畫かれ、讀み行く誌上に先生の御聲を聽く心地が致しまして、一府に有り難き感じをさせて頂く樣になりまして、月々全誌の到着を待ち兼ねます。今一ッ私には先生に對して奇なる事緣は先生より時々賜はる御芳翰であります。夫れは未だ拜眉をも得ざりし時に始めて頂戴せし御手紙に對しては、無限に感想を深くさせて頂きましたが、爾來何時の御手紙とて短かき端書に至る迄讀む度毎に感極りて泣き、御念佛は口を衝きて强う喜ばせて頂く事てあります。

上來私の歷程を跡つけますれば、全く三願轉入をさせて頂きて居るのであり升。即ち最初の善惡因果に氣付かせて頂きました時代は第拾九願の修諸功德に攝せられ、次に東陽師の門下に在りて念佛一法に歸せさせて頂きましたが、尙ほも自力の不可能を知らずして何事も我が力にて成るが如く計らひて念佛させて頂きし時代は第二十願の植諸德本に入れられ、終りに近角恩師の御指教に接して身心兩界の重擔を佛陀に全托させて頂きし時代は第拾八願の絕對他力に引き付けられたので、佛陀本願の善巧なる御方便に育てられ、今は唯だ計らはず御恩を喜ばせて頂くばかりてあります。然れば此の上は唯だ慚愧と感謝との生活よりほかに何物もないのであります。

定散諸機各別の　　自力の三心ひるがへし、
如來利他の信心に、　　通入せんと願ふべし。
彌陀大悲の誓願を、　　深く信ぜん人はみな、
ねてもさめてもへだてなく、　　南無阿彌陀佛を唱ふべし。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

斯くて私は今回の病中に於ける感謝の狀態を少し述べさせて頂き度く思ひましたが、餘り永くなりますから後日に讓らせて頂きます。南無阿彌陀佛。

七月十五日

行誡上人

洞盡通
功德池の無漏の流にみがゝれていしもかはらも玉がはのみづ

仙必通
かれてわが陶賴耶の鏡みがゝれてひとの心もうつるなるらむ

神足通
ゆかばやと思ひばやがて足柄の關のとさしもさはらざりけり

宿命通
幻のゆめぢなからで過ぎし世をうつゝとなして見るが珍らし

天耳通
みゝと川きしうつ波もなみならぬみ法の音ときこえこそすれ

天通
いつしかと心のかすみさえはてゝ見むと思へばみよし野の山

貪
天が下みなわがものとなれるにも猶ものたらぬ心地こそすれ

嗔
いが栗のとげ〳〵しさのみの來や落ていかなる火に燒るらん

癡
はらくろき人の心やぬばたまの闇路をたどるたねとなりけむ

講義

近角常觀

歎異鈔

第十二章

大切の證文につきて

歎異鈔の中には時々證文といふことを繰返してある、現に此十二章には二度までも出てある、即ち「あやまて學問して、名聞利養のおもひに住するひと、順次の往生いかゞあらんずらんといふ證文もさふらふぞかし」といひ又「諍論のところにはもろ〳〵の煩惱おこる、智者遠離すべきよしの證文さふらふにこそ」とある、十七章に至りては「邊地の往生をとぐるひと、つゐには地獄におつべしといふこと、この條いづれの證文にみえさふらふぞや、學生たつるひとのなかに、いひいださるゝことにてさふらふなるよし、あさましくさふらふ、經論聖敎をばいかやうにみなされてさふらふやらん云云」とありて、いかにも何時でも證文といふことに常に力を入れしある、而して最も問題となるべきは結文の中に

大切の證文ども、少々ぬきいでまゐらせさふらふて、めやすにしてこの書にそへまゐらせてさふらふなり

とある文字である、此十二章十七章の語氣より察して見れば此大切の證文とあるは如何にも大切の證文に違ひない、そして其大切の證文をぬき出して此書に添へて置くとあるが、其證文は何んであろうかといふ問題である、かねてより此問題につきて歎異鈔を拜讀する度毎に心にかゝつてあつたが遂に確信する考が出來たから一刻も早く發表して同朋の方々に御知らせしやうと思ふのである、實は結文を述ふる時に申してよきなれど、夫ではあまり遲くて問に合はぬ憾がある、何んとなれば是は歎異鈔全體に渡る大問題にして、此問題を解決して置かなければ、歎異鈔全體の組み立てが分からぬことになる、夫故今十二章に證文といふことが隨分、やかましく繰返してあるから、夫を機會にして此問題を解決して置かふと思ふのである。夫につきて古人の說を擧げて見るに、未た一々調べたのでないから分からないけれども香月院師と了祥師との兩說を以て代表と見做すことが出來るであろう、香月院師の考は單純で、大切の證文をぬき出して歎異鈔の附錄にしてあつたものなるべけれど、惜哉現今失へて仕舞ふたものゆへ分からぬといふのである、了祥師は大に考へられたのである、即ち世上傳ふる所の親鸞聖人血脈文集といふ書がある、夫が歎異鈔の附錄にしてあつた證文であろうといふのである、何故なれば其書の第六の文章が法然上人親鸞聖人御流罪のことを書きてある、如何にも其文章か此歎異鈔の終りに附け加へてある、法然上人他力本願念佛宗を興行す云云の文と酷だ肖てある、そこて此血脈文集全體が歎異鈔の附錄てあつたのであろう、其他中の御消息は皆なくなつて其御流罪の文章丈か今に附錄となつて殘つたのであろうといふ考てある、一往最もな說で、何人でも血脈之集を繙くなり、此第五の文には如何にも歎異鈔附加の文と似て、あるとを感ずるであろう、然れども此血脈文集は寶曆年中越後の順崇師即香樹院師の實父の出板されたるものにして其はしがきにも書てあるが末燈鈔及御消息集と同じく、聖人の御消息を集めたるものてある、而して其文章の意味をたどるに歎異鈔の證文として書き集めたといふには頗る適切ならざるものがある、而して第五の文と歎異鈔とは如何にも同趣意のものなれど血脈文集の方はたしかに聖人の自記の文章てある、歎異鈔はたしかに歎異鈔著者の筆に成つてある、或は聖人の自記の文章を據として書きたものと

は考へられるも、血脈文集の文其儘が前後は失せて其文だけ殘つたといふには少し信じ難い、のみならず全體歎異鈔の著者といふ人は文章の筆致といひ、組立といひ、頗る適切剴切なる扱をする人である、漫然と御消息を集めて、大切の證文ども少々ぬきいでまゐらせさふらふて目やすにして此書にそへまゐらせてさふらふなりなど云ふ筈はない、そこて私は久しき前から他の方面より歎異鈔の組立てにつきて氣附きつゝあつたとがある、夫は既に第十一章にかゝつたときに其事を明言して置きた、即前九章と十一章已下とが妙に相照應することてある而して第一章と第十一章と照應し、第二章と第十二章と照應し、第三章と第十三章と如何にもよく照應するのに不思議に感じて、其後の章も一々之を試みんと企てたも、第四章慈悲に聖道淨土のかはりめありといふに對して、第十四章一念に八十億刼の重罪を滅すと信ずべしといふとといふは少しく不適切の感を免れぬ、固より信仰上のことなれば、強て引合せば連絡のつくことは必定なるべけれど牽强附會に陷るの虞ありし故に其事を明言しておきた筈てある、されど又第十二章にかゝるとき又第二章と照應して如何にも兩々相符合する妙趣に感嘆極りなき次第てあつた、第二章の眼目たる、自餘の行をはげみて佛になりべかりける身が念佛をまうして地獄におちてさふらはゞこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかぞかしに對して、第十二章に自餘の敎法はすぐれたりともみづからがためには器量及びがたし云云の筆意如何にしても唯事ならず思ふて居つたのてある、しかるに先日美濃高須の敎學會に出席して歎異鈔を講じ、其最終日の前夜、此大切の證文につきて考へて居る間に、目やすにして此書にそへまゐらせてさふらふとある、目やすといふ文字に大に着眼したのてある、そこて此大切の證文とは前九章の祖訓夫自身のとてある、夫を第十一章已後に一々擧ぐる異義を正さる歎異鈔の正目的に對する目やすとして、初めに添へられたのてあるといふとに忽焉として感得發明する所あつた、此に於てや久しき間解けんとして未た十分解けざりし問題一時に渙として釋然として氷解解得するとを得た、殆んど疑を挾むべき餘地がない、そこて此度は方向を異にして第十四章の異解を正さるゝ目やすとして第四章を顧みた、頗る適切てある、「念佛まうさんごとに罪を滅せんと信ぜんは既にわれと罪をけして往生せんとはげむにてこそさふらふなれ、若ししからば一生の

間おもひとおもふことみな生死のきづなにあらざることなければ乃至ただし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議のことにもあひ、病惱苦痛せめて云云とあるを、第四章の祖訓の目やすに照すに、聖道の慈悲はものをあはれみ、かなしみ、はぐゝむなり、しかれどもおもふがごとくたすけとぐることきはめてありがたし、又淨土の慈悲といふは念佛して、いそぎ佛になりて云云とある、我等は此世て罪は滅せぬ、命終して初めて煩惱惡障を滅して無生忍をさとる、其時が佛てある、大慈大悲てあるといふとになる、抑前九章と第十一章已下とを嚴密に照應せしむるを牽强附會と感じたるは、古來香月院已來傳はりたる初の九章は祖訓なる故經の如し、後の九章は著者の筆なるか故に傳の如しといふ考が先入となりてある、而して大學の如き傳は經を釋したのてあるといふ思想がある、そこて前後の照應を考へるに前九章の祖訓を本として之を解釋する爲の後各章と見るゆへに、慈悲に聖道淨土のわかれめありといふことの解釋としては一念に八十億刼の重罪を滅す云云は少しく迂遠に見えるのてある、しかるに歎異鈔としては後の各章が主要なる問題てある、其問題解決の目やすとして其意を闡明するに適切なる祖訓を拔き出して目やすになし下されたのてある、勿論歎異鈔として後各章に擧げたる異義を正すためにして、且つ其異義たることの明らかになる標準たるべき聖人直々の御言が第九章てあるとは既に第十一章を講じばしむるときに明言はしたれども、前九章が即ち大切の證文也、後が目やす也とまて判明せざりし爲に、知らず識らず前九章を本として後各章との照應を考へたゆへに、其間に少しく適切ならざるものがあるやうに思ふたのてある、しかるに此の如く判明してみれは第十一章已下各章の異解に對する目やすとして、第一章已下各章か一々適切なるものがある、第十一章に對して第一章、第十二章に對して第二章、第十三章に對して第三章は最明白々、第十四章に對する第四章は今辨ぜし如し、第十五章は煩惱具足の身をもてすてにさとりをひらくといふこと不可也、決して今生にさとらるものにあらず、彼岸に往生し、盡十方無碍の光明に一味にして、一切衆生を利益するときが悟りてある、此身てさとりをひらくといふは釋尊のごとく種々應化身を現し、三十二相八十隨形好を具足して說法利益出來るにや、之を第五章に照すに、親鸞は父母孝養の爲に念佛一遍にだもまふしたるとはない、我力にてはげむ善てなきゆへ今生ては父母ても救へぬ、淨土に往生して神通方

便を以て一切衆生を濟度するといふのである、次に第十六章は信心の行者惡事ある毎に一々廻心せねばならぬといふが一向專修の人は廻心といふとは一期に一度であるのみである、かくの如きことを云ふものは、口には願力をたのみたてまつると雖、心にはよからんものをこそたすけたまはんと思ふからである、まことの信心だにあらばわろからんにつけてもいよ〳〵願力を仰ぎまゐらせば自然のことはりにて柔和忍辱の心もいでくべし、すべて往生にはかしこきおもひを具せずしてただほれぼれと彌陀の御恩の深重なることをつねにおもひまゐらすべし、しかれば念佛もまうされさふらふ、これ自然なりと之を第六章にてらすに專修念佛のものがわが弟子ひとの弟子といふことを爭ひ、一旦弟子が師にそむけば廻心せねばならぬ、往生すべからずなどいふはもての外である、親鸞は弟子一人ももたず、偏へに彌陀の御もようしにあづかりて念佛まふす人は如來の御弟子である、自然のことはりに相叶はど佛恩をも亦師の恩をもしるべきなりと、前後照應して自然の德によりて佛恩師恩がほれぼれと喜ばれると、心地よき程相合すると掌を合せたるが如し、第十七章の如きは一寸見れば別の樣なれども信心かけたる行者ゆへ化土に入るのである、信心の行者少きからである、されど疑の罪を償ひて報土に入るのである、夫故第七章には念佛者は無碍の一道である、何故なれば信心の行者は一切無碍であるからである、此無碍の光に遇はぬのが化土であるといふのである、第十八章に施入物の多少により大小佛になるべしといふは不可である、之を第八章に照すに念佛は行者の爲に非行非善である、何ぞ多少大小を論すべき、かく第十一章より十八章に至までの歎異に對して一章より八章までの證文を目やすにしてあるのである、そして第九章は外に對すべき所なきが如く見ゆるが、是亦强て仔細に考ふれば、意味は連續して恰も結文に照應する如くある、結文は異解を擧げ是皆信心の異るにより事起りたるのなりとて、信放諍論の御物語を擧げ、源空が信心も如來よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も如來よりたまはらせたまひたる信心なりとあるに對して暗に第九章の親鸞も此不審ありつるに唯圓房おなじこゝろにてありと何れも同一信心の趣を擧げたものである、是て十分なれど意味の一致を言へば結文の彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、されば〻そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよとて善導の機の深信と同じといへるは、恰も第九章の不喜入定聚之數不快近眞證之證の御悲躍即、踊歎歡喜の心少きこと、又いそぎ淨土にまゐりたき心なきを懺悔し、これにつけてこそいよ〳〵大悲大願はたのもしく、往生は決定と存し候へと符合するが如し、併し是は自然の一致である、已上煩はしきを厭はず、大體に於て第十一章已後に對する前九章が目やすの證文たることを辨じたるのである、かく着眼すれば歎異鈔のはしがきは異を歎く前に目やすたるべき故親鸞聖人御物語の趣耳の底に止る所、聊か之を記すと云ふ書き出しである、第十章は其祖訓を結びて正しく其無義を義とする正義に對する異義の條々を擧ぐるといふ書き出しである、そこで結文には、いづれ〳〵繰言に候へどもかきつけさふらふなり、生存中は同心行者の不審のある人には話をするが、閉眼の後は唯信鈔等の聖人の御用ゐの聖教を讀め、そして大切の證文を書きつけて此異義に對する目やすにして此書に添へたといふ書方なり、いかにも〳〵庖丁の牛を解くが如く、是て歎異鈔の大體、刀を迎へて裂くるの感がある、偖私が此考を高須に於て感得したる後翌日之を辨じたる所、不思議なる哉同說を知れる人々がある、不審の餘之を尋ねたるに同地の服部龍曉市の家に高閣に束ねられてあつた、古く傳へる歎異鈔悲母報恩記といふ、至極不完全なる斷簡零墨ともいふべき筆記本がある、何人の辨じたものとも分からぬ、其中に恰も同樣の意味が說きてあつた、そこで、私かに以爲、古人が或は私に此說を告げ知らして下されたのではなかつたかと感ずる次第である、事全く暗合であるが、一は私の考に對して古人の同意を得たるの感あり、又無名の古人の切を沒せざるために事實を披瀝したる次第である。

謹告

本號は發行期日に差迫り匆卒中に編輯候ひし爲め規定の四十頁を欠くに到り候。此分は次號に於て必ず補足仕るべく候也

時報

西川唯信居士追悼會

唯信居士西川藤吉氏が希有最勝の信仰を抱きて六月廿二日遂に永眠せられたる事は前號所報の如し。同月廿七日求道學舍信仰談話會席上、生前の法契を慕ひて追悼會執行の議我が同朋の間に熟し、七月四日日曜講話の當日を以て講話席上に形ばかりの靈壇を設け、聊か追慕の至誠を致す。到席者は一般講話來聽者にして、此の日特に西川氏令室は遺孤眞吉君、みつ子孃を伴ひて參拜し給ひ、又居士の令弟新十郎氏初め遺族近親の方々も幸に參列あり、若松傳道中なりし近角も、其前夜歸京して席に連なる、又居士が生前の親友としては萩野文學士松崎法學士參會せらる。初めに近角恭しく阿彌陀經を拜誦し、終りて令夫人には令息令孃を伴ひて拜禮燒香あり、以下順次近親諸氏の禮拜畢りて後、長尾軍醫正、姉崎博士母堂、我が男女同朋を代表して恭しく拜禮燒香せらる。次て居士生前無二の親友なる萩野文學士は、高等學校以來骨肉も啻ならざる親交を赤裸々に叙述して、最後に其の入信に及び直狀皆行一點の曇りなき居士が一生に對し追慕止み難き至情を表白せらるゝ所あり、聽者一同覺えず居士の眞面目に再會する心地して暗涙抑え難きものありたりき。又次に舊友松崎法學士は居士が舊時の同僚として、其の如何に眞摯全力の人なりしかを紹介せられ、最後に近角は居士の信仰に就き其所感を披瀝して、此の法緣を結びたり。まことに微かなる營みたりしと雖も、斯くの如く遺族近親の方々を初めとして、居士生前の信友同朋一佛の膝下に集まりて追慕感謝のまことを致す。居士今や安養界に在り、定めて悲憐嘉納し給ふ可き思へば、吾人は言ふ處を知らざるなり。

夏期傳道概況

前號豫報の日割を以て近角は彌々夏期傳道の途に發程したり。先づ六月廿六日日曜講話を終へて即日午後若松求道會に向ふ。若松は數年來有緣の地、滯在一週日、「唯信鈔」及び「唯信鈔文意」を講本として親鸞聖人の實驗し給へる他力信仰の眞味を鑽仰し奉る。同地方信仰の機緣、年と共に彌々增長し給へる由、求道會同朋諸氏の熱誠眞に感謝に堪へざるなり。近角滯在中同地同朋諸氏の賜はりたる懇情に對し謹みて感謝の意を表し奉る。七月三日夜上野驛着一旦歸京。四日前記西川唯信居士追悼會を營み、同日新橋驛發、再び、名古屋講習會に向ふ。名古屋滯在五日より七日迄、「執持鈔」に就きて同じく靈人の信仰を讃仰す。同市滯在中は舊知の信友諸氏東西より來訪を賜はりし由、深く感銘申し居り候。八日より轉じて美濃高須講習會に出席、十五日迄八日間同地同朋諸氏の需めにより自著「懺悔錄」を講本として、「歎異鈔」の眞髓、惡人救濟の德音を愛樂し奉る。同地は今春一度び有緣の地、殊に今回は僧侶諸氏非常の熱誠を以て聽講を賜るあり、聞法求法の精神一體に橫溢して實に近時の痛快を極はめたる由、佛陀冥々の御催し、眞に謝するに辭無き也。十六日再び名古屋に立寄り、故西川居士の令兄麻生氏の監し給ふ日本銀行支店に於て一席の法緣を結び、同夜發程十七日早昧再び新橋驛着、直に上野不忍辨天內開催の大日本佛敎青年講習會に出席す。同會は實に近角にとりては宿緣深厚の會合にして創始以來本年に到りて會を重ぬる十有八回、其間滯西中の二年を除きては、一回として出席を欠したる無し。今年の如き又實に此の好因緣を慕ひて特に歸東列席したるもの、講本は「唯信鈔」及び「唯信鈔文意」にして、十七日より十九日迄三日間、聖人が唯一心の信仰に就き聊か渴仰の微衷を表し奉る。猶ほ此の間の於て臨時第二求道會及び求道學舍日曜講話を開催するあり。在京僅々三日に過ぎざりしと雖も、其間充分に時間を利用し得て各方面に法緣を結ぶを得たるは眞に感喜の外なきなり。十九日青年會の閉會を待ちて同夜直に發程、途中京都伏見御同朋の懇情もだし難くて同地に下車、共に慈悲の無窮なるを謝し奉り、直に西下四國高松の御同朋と會す。高松は若松と同じく、實に此數年間各歳有緣の地にして、同地御同朋の常に變らざる信仰的御もてなし、まことに感銘の外あらざるり。滯在二十一日より二十七日に至る七日間「唯信鈔」及び「唯信鈔文意」を講述す。吾人は未だ其の情報を知る能はずと雖も、佛陀の冥祐必ず同地御同朋の信念に甘露の慈雨を注ぎ給ひたるべきを疑はず。而して廿七日夜同地を辭し、昨廿八日より今廿九日にかけ安藝竹原町の同朋に會して共に法味愛樂中の豫定也。以上は近角今夏傳道發程以來の概況に過ぎず。定めて遺洩せる所も多からん。何れ近角小閑を得たるの日、更に筆を改めて讀者諸君に告げ參らせ、合せて各地の御同朋に謝し。奉る所あるべし。幸に御諒察を請ひ奉る。

爾後の傳道日割

八月一日より五日まで	福岡大學佛敎講習會
全六日	直方
全七日	大隈
全八日	伊方
全九日	後藤寺
全十日	行橋
全十一日	四日市
全十二日	中津
全十三日	柿坂
全十四日	玖珠
全十五日	日田
全十六日	木屋
全十七日	吉井
全十八日	久留米
全二十日二十一日	美濃岐阜講習會
全二十一日午後	江州彦根
全二十二日	江州愛知郡東圓寺
全二十三日	江州蒲生郡內也
全二十五日より三十一日まで	能登國字出津
九月四日より十日まで	越中

求道會館設立趣意書

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しく、一般に道義の制裁弛み去りて、益々信仰の必要を感し、一般に道義の制裁弛み去りて、益々信仰の必要を感し、此に於てや青年學生にして眞面目なる者嚴格なる實行を想ふ。此に於てや青年學生にして眞面目なるものは、確實なる信念を攫まんとして胸中幾多の苦悶を抱き、社會實務の人にして志操清淨なるものは其理想を實現せむが爲めに、人生問題の解決に辛酸を嘗めざるはなし。嗚呼信仰の饑渴現時の如く劇しきはなく、求道の志此の如く切實なるは未だ嘗て見ざる所也。

昨年已來、聊か此の時運の必要に應ぜんとする微志あり、輩の企てられし跡を引繼ぎて、一方には求道學舍を設け、等の道を求むるの人々の寄宿に充て、寢食を同じくし、實踐躬行に勉め、また一方には日曜講演を開きて眞面目な人々と共に心を潛めて信仰の問題を講じ、互に心靈の修養に從ひしが、幸に佛陀冥祐と師友同情とによりて其期する所空しからず、學舍は常に滿員にして絃多の申込に負き、假會場なに充てたる居間は狹隘を訴へて求道の人々を容るゝの餘地なし。此に於てや止むなく、懇切なる道友の勸告に從ひ、學舍を擴張し、會館を設立して以て焦眉の急に充てむと欲す。實に簡實なる先輩の指導に從ひ忠實なる親友の贊助を仰ぎ、實なる實行により、漸次其結果を舉げむことは是實に不肖の至願也。

從來首都に於て佛教徒に屬する會館の設なく、其不便を感ずる事一日の事にあらず。而して屢々計畫せられて未だ容易に實行の緒につかざる所以のものは、蓋し其規模大にして完全を期すればなり。故に先づ現時の必要に應ずべき適宜の會館を設立して、漸次其大なるものに進まんことを欲す。是先づ本會館の建設を企圖して佛教者一般の需要に充て且つ清潔なる社交の中心に供せむと欲する所也。予西遊の際、泰西青年會の組織及會館の設備等を初とし、佛教者の社會的施設を詳細調査し來りて、此等の事業の我國佛教者の手に成らむを望む實に切也。本會館建設の如き若し燎原の一點火たるを認得ば幸之に過るなし。翼くは四方同感の諸士不肖が微衷を諒察せられ、協力贊助し玉はらむことを、謹て白す。

明治三十六年十月

發起者　近角常觀

求道會館設立喜捨金受領報告（第四十回）

一金壹圓也　東京　宇佐美榮太郎殿
一金壹圓也　東京　松本謙道殿
一金九圓也　周防　小野島覺哲殿
一金參圓也　美濃　佐竹政次郎殿
一金壹圓也　成田　葛原運次郎殿
一金貳圓也　横濱　山本泰一殿
一金貳圓也　山形　井上豐忠殿
一金貳圓也　天津　後藤龍緣殿
一金貳圓也　駿河　山田善太郎殿
一金拾五圓也　小樽　麻里傳之助殿
一金貳圓也　仙臺　正木昇殿
一金五圓也　山口　波多野靜殿
一金五圓也　名古屋　箕浦現遵殿
一金五圓也　名古屋　龍山眞專殿
一金五圓也　名古屋　大嶋和溪殿
一金壹圓也　名古屋　萩野仲三郎殿
一金貳圓也　東京　大野吉郎殿

小計金五十六圓也
通計金參千百七拾八圓〇四錢也

右御寄附を忝うし難有く奉存候茲に謹みて奉感謝候也

近角常觀校訂

冠頭 歎異鈔

第三版 部數ニ應シ充分割引ス

定價五錢、郵稅四冊迄貳錢、施本用小冊子

此の『歎異鈔』は聖人の遺教を世に普からしめんが爲め、施本用小冊子として出版せるものにて、讀み易きやう字をまばらに植ゑ、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より參照すべき文を引用し、親切に作りたるものなり。教家諸君の御一顧を俟つ。

近角常觀著

信仰之餘瀝要略

初版 部數ニ應シ充分割引ス

定價五錢、郵稅四冊迄貳錢、施本用小冊子

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を拔萃し、傳道用小冊子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

發行所　東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六六九六番　求道發行所

文學博士　前田慧雲先生述

佛遺教經講話

明治己酉初夏、學德共に高く一世の師表と仰がるゝ前田博士が、佛世尊最後の遺訓を提げ、之を講ずること穩健眞摯にして而も條理明晰、法門の深奧を發揮し、淳々娓々、人の肺腑に徹せざれば止まざるの慨ありき。本書は右旬日に亘れる講演を筆錄せるものにして、苟も佛の慈訓に浴せるもの、宗派の如何を問はず、又僧なると俗なるとの別なく、俱に三讀せざるべからざるの良書なり。

菊版二百餘頁頗る美本全一冊　定價五十五錢郵稅六錢　製本十月十日

豫約價郵稅共金五十錢

豫約申込期日九月十日限り　豫約前金を要せず　往復はがきにて住所姓名を明記して申込あれ

發行所　東京市神田區神保町一番地　振替口座東京一〇五一〇番　靈光社

無上の寶典　最好期勿逸　豫約募集　豫約申込前金を要せず　申込往復はがきに限る

靈光

靈光は修養信仰の好指針にして家庭の好伴侶なり

第三年第八號（八月一日發行）より毎號前田博士の御傳鈔講話を連載し其他知名大家の玉稿を滿載す

一部三錢郵稅五厘　年一錢　本誌は往復はがきにて申込まば直に送付す

一部六十三錢郵稅共　年一圓　本誌は往復はがきにて申込まば直に送付す

發行所　東京市神田區三崎町四丁目　振替口座東京一〇五一〇番　靈光社

發行所　東京都西多摩郡東京村　振替口座東京一〇五一〇番　靈光社

賣捌　東京市本郷區森川町　江森倉飯　江森書院　教興

清澤先生七周忌紀念號

精神界

▲毎月一回十日發行
▲一部十五錢 ▲三月卅錢
▲一年一圓七十錢 ▲郵税不要

▲本號定價廿五錢

○回想……清澤先生

◉第一日

○七周忌法要及感謝會
○開會の辭……佐々木月樵
○我信念朗讀……眞宗大學主幹 月見覺了
○感謝文朗讀……多田鼎
○感謝第一……小島慧見
○感謝第二……文學士 富岡數雲
○感話第一……文部次官 岡田良平
○感話第二……福田見昌
○感話第三……松本雪城
○感話第四……近藤純悟
○感話第五……高等師範學校教授 萩野仲三郎
○感話第六……文學士 秦敏之
○感話第七……金[illegible]鑑
○感話第八……眞宗大學教授 小原一[illegible]
○感話第九……金子大榮
○感話第十……成瀬賢秀
○感話第十一……文學士 [illegible]田鼎
○感話第十二……第一高等學校教授 數藤斧三郎
○感話第十三……眞宗大學教授 河野法雲
○感話第十四……關根仁應
○感話第十五……井上豐忠
○感話第十六……眞宗中學校長 稻葉昌丸
○閉會の辭……曉烏敏
○茶話會

○清澤滿之師を憶ふ……陸軍幼年學校教官 人見忠次郎

◉第二日

一、第一記念講演會
○開會の辭……和田龍造
○模範的佛徒……帝國大學教授 常盤大定
○清澤先生……金子大榮
○感化……眞宗大學教授 住田智見
○教場に於ける清澤師……帝國大學教授 藤岡勝二
○吾が眼に映じたる清澤師……眞宗大學教授 齋藤唯信

二、第二記念講演會
○開會の辭……曉烏敏
○追懐談……文學博士 上田萬年
○エピクテタスと清澤先生……文學士 吉田賢龍
○自己を辯護せざる人……曾我量深
○清澤師未だ死せず……前文部次官 澤柳政太郎
○親交二十年……文學博士 南條文雄
○閉會の辭……曉烏敏

三、茶話會
○追懐第一……文學士 吉田賢龍
○追懐第二……井上豐忠
○追懐第三……眞宗中學校長 稻葉昌丸
○追懐第四……帝國大學教授 藤岡勝二
○追懐第五……文學士 本多辰次郎
○追懐第六……眞宗大學主幹 月見覺了

◉第三日

一、第三記念講演會
○開會の辭……多田鼎
○七周忌所感……眞宗大學教授 楠秀丸
○清澤先生を懐ふ……近藤純悟
○清澤先生及其信念……文學士 近角常觀
○閉會の辭……佐々木月樵

○報道
○東京たより……浩々洞
○京都の七周忌……安藤州一
○福井より……佐藤孫四郎
○金澤の追想會……京極逸藏
○扇城たより……玉置ます
○名古屋臘扇忌……一柳智成
◎若松たより……若松求道會
◎淨法寺臘扇忌……高橋勘太郎
○松任臘扇忌……安島光三郎
○熊本たより……稻葉道意
○盛岡の法要……工藤倉吉
○大阪の臘扇忌……山口順恭
○神戸臘扇忌及講演會……増谷蓼水
○宮崎より……落合寅平
○白鷺城の臘扇會……近藤順悟

東京巣鴨町二ノ三五番　無我山房　振替東京第三一二二番

勸學 赤松連城師題辭
佛教大學長 薗田宗惠師序文
六條學會主幹 富井隆信師信文
佛教大學講師 雲山龍珠師述

正信偈講義

總布上製九十五錢
假綴並製七十五錢
小包料各八錢

附錄 正信偈祖釋會本

◉祖釋會本丈代七錢郵税二錢

古來正信偈の講錄少なしとせず、然れども時勢の變遷によりて其の**教授上の方法**、**講義の躰裁**自ら變化を免がれず、本書は**佛教大學講師**雲山師が多年の間**六條學會**に於て時勢に應じ、實地に講述せられし事**數十回**の又師の**教授**によりて**受驗**せられし諸士は一千餘名に達す、實に**三經七祖**の大綱に渉りて正信偈の深意を明了に解説せしもの也、如何に本書が詳細にして而かも有益なるかは既に業に諸士の知らるゝ所なり、特に正信偈に關する**祖釋會本**即ち六要鈔、正信偈大意、銘文を別冊**附錄**とし、以て研究諸士の便利に供す、幸に必讀を乞ふ。

後藤霞城師著
●**正信偈略釋**　金十六錢　郵税二錢

勸學利井鮮明師校閲
勸學赤松連城師題辭
勝山善讓師述
●**正信偈問答記**　金四十錢　郵税六錢

勸學足利義山師述
●**三帖和讚問答記**　金三十錢　郵税六錢

發兌 **興教書院**
京都油小路御前通上ル
振替口座東京四一一三番

勸學足利義山師著
●**眞宗百題啓蒙**　實費金一圓　小包十二錢

同
●**眞宗安心三十題啓蒙** 上　金四十五錢　郵税六錢

勸學島地默雷師題辭
輔教米村永信師講述
●**宗要安心論題**　金五十錢　郵税八錢

新刊廣告

近角常觀校訂

冠頭 唯信鈔 唯信鈔文意

全一冊 八月十日發行豫定

定價一冊七錢 郵稅三冊迄貳錢

部數に應じ充分割引す。

右唯信鈔は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、唯信鈔文意は本書を弘く世に行はしめんが爲め、聖人特に文意を著して、愚癡無智の輩に授け給へるものとす。聖人に文意の著あるに見ても唯信鈔の他力信仰上必須の聖典たるは知る事を得べし。「歎異鈔」を初めとして聖人一代の化導、多く此の聖典を淵源すと言ふも過言に非ざるなり。爾るに世久しく此の聖典を忘る。玆に本所感ずる所ありて、此の兩書を一冊にまとめて對稱拜讀に便ならしめて刊行す。校正を嚴密にし、冠頭を加へて參照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同胞諸君には是非に一讀を冀ひ奉る。

發行所 東京市本郷區森川町一番地 振替口座東京一六六九六番 求道發行所

規定

一 本誌は毎月一回一日發行とす
一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
一 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一 郵劵代用の節は五厘切手にて一割增の事
一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一 本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊に付五厘
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十二年六月二十七日印刷
明治四十二年七月一日發行

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所 (振替口座東京一六六九六番)
大賣捌所 東京市神田區表神保町 東京堂

近角常觀著作書目

訂正增補 信仰の餘瀝

本書は著者が十餘年前端なくも苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心實感の披瀝に努めたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸にも發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、發賣部數既に一萬餘部に達し、今や其の第十版を出すに及び、更に根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に增補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附錄として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て最も明かならん。

第十版 定價卅錢 郵稅四錢 珍袖美本

親鸞聖人の信仰

本書は嘗て本誌に連載せる『眞宗慶嘆』に大訂正を加へて一書に纒めたるものなり。絶對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し、著者が平生抱懷せる渇仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

第貳版 定價七十錢 小包料八錢 クロース綴

人生と信仰

●第一章 人生問題と信仰 ●第二章 悲觀思想と信仰
●第三章 倫理力行と信仰 ●第四章 犯罪心理と信仰
●第五章 社會問題と信仰 ●第六章 國家秩序と信仰
●第七章 世界宇宙と信仰

本書内容は目次示すが如し。一昨年『求道』秋季號として發行したるもの近時四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び茲に一冊として刊行するに至りぬ。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若しくは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書ある所以也。初版既に盡きて今又第二版なる。人生問題の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

第貳版 定價卅錢 郵稅四錢 珍袖美本

懺悔錄 附錄『歎異鈔』

本書は著者が實驗の信味に基づき、古來求道者の金科玉條たる『歎異鈔』の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に欝積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と、最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黑闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ『懺悔錄』の名ある所以にして一讀入信の人少からず

第五版 定價廿錢 郵稅四錢 珍袖美本

申込所 東京市本郷區森川町一番地 振替口座東京一六六九六番 求道發行所

前號要目

求道

◎誓願の網をとるべし　自督

◎親鸞聖人の信仰　講話

◎不可思議の信　聖傳　近角常觀

◎デヤータカ釋尊傳
第二十五　賭に勝ちし牡牛
第二十六　老婦の黑牛

告白

◎分つたと云ふは分らぬなり　佐々木博

哀悼

◎嗚呼珠光院唯信居士　近角常觀

歎咏

◎明日《長詩》　增田八風

◎海《同》　同

時報

◎清澤先生七周忌◎求道學舍第七回祀年日◎夏期傳道日割

附錄

◎夏と精神修養　近角常觀

求道第六卷第七號　明治四十年十一月十三日第三種郵便物認可　明治四十二年七月一日發行（毎月一回一日發行）

東京市神田區英士代町二ノ一三光發印刷